

目次

哺乳類

・基本事項	2
1．飼い主の責任	2
2．動物販売業者の責任	2
・共通事項	4
1．動物購入者が種類や品種を選ぶために必要な情報	4
2．終生飼養を確保するために必要な情報	5
3．適正飼養を確保するために必要な情報	5
4．所有の明示	5
5．繁殖制限に関する情報	6
6．人と動物の共通感染症の予防に必要な情報	6
7．逸走と危害の発生を防止するために必要な情報	12
8．生物多様性保全の見地から必要な情報	12
・動物種ごとの個別事項	14
1．犬 食肉目イヌ科	14
2．猫 食肉目ネコ科	22
3．ウサギ ウサギ目ウサギ科	29
4．ハムスター げっ歯目ネズミ科	34
5．マウス げっ歯目ネズミ科	37
6．スナネズミ（ジャービル） げっ歯目ネズミ科	38
7．モルモット げっ歯目テンジクネズミ科	40
8．チンチラ げっ歯目チンチラ科	41
9．シマリス げっ歯目リス科	43
10．プレーリードッグ げっ歯目リス科	46
11．モモンガ げっ歯目リス科	47
12．ハリネズミ 食虫目ハリネズミ科	48
13．フェレット 食肉目イタチ科	50
14．スカンク 食肉目イタチ科	53
15．アライグマ 食肉目アライグマ科	54
16．フェネックギツネ 食肉目イヌ科	55
17．ワラビー 有袋目カンガルー科	56
18．ポッサム（フクロギツネ） 有袋目クスクス科	57
19．サル リスザル：霊長目オマキザル科、マーモセット：霊長目キヌザル科	58
IV．参考	61
引用及び参考資料等	61

1. 基本事項

動物を飼うにあたっては、まず飼おうとする動物について事前に十分調べ、適正に飼えるかどうかの判断も含めて必要な準備をすべきところです。しかし、「今すぐに飼いたい」、「かわいい」、「珍しい」といった一時的な感情や衝動的な動機のみで、十分な知識のないまま安易に飼い始め、結果として、不適切な飼養や飼養放棄につながり、近隣とのトラブルや虐待、遺棄等の問題を引き起こす例が後を絶ちません。さらに飼い主が飼いきれなくなる等の理由で、都道府県等が引き取らざるを得ない犬や猫の数は、近年減少しつつあるものの、全国で40万頭近くに及んでいます。また、遺棄された動物が野生化し、在来の野生動物を捕食したり圧迫する等、自然環境保全上の問題も起きています。

このようなことから、平成11年12月に改正され、平成12年12月に施行された動物愛護管理法では、「動物が命あるものであること」と「人と動物の共生」が謳われ、動物の飼い主等の責任が強化されるとともに、動物販売業者については、動物の購入者に対し当該動物の適正な飼養保管の方法について、必要な説明を行い、理解させる責任が新たに課せられました。動物は「命あるもの」であり特別なもの、特別な配慮が求められるものとして法的に位置づけ、動物の売買に当たっては、飼い主となる購入者はもちろんのこと、販売業者にも販売に当たっての特別な配慮を、その生命があるという特殊性を踏まえて、責務として求めているわけです。

購入者が、購入に先立って、当該動物の生態、生理（寿命を含む）、飼養方法等の動物の特性に関する十分な知識をもとに現状での飼養の可能性、さらには、住宅環境や家族構成の変化など、飼い主の将来的な生活設計を踏まえ、終生飼養ができるかどうか慎重に判断、選択するために必要となる情報の提供が求められています。

動物を購入するときの窓口である動物販売業者の説明、情報の提供がペット動物をめぐる多くの問題を未然に防止するための重要なポイントとなっているのです。

1. 飼い主の責任

法律にも謳われたように動物は私たちと同じように命ある生きものです。飼い主は動物の生態、習性、生理を理解し、動物に合った適正な取り扱いを行うことが必要であり、それは人間社会に動物を引き入れ、飼養下に置いた人間がとるべき責任といえます。ただ「かわいい」、「好き」だけでは飼養はできません。

飼い主はその動物に関わる全てに責任があります。ここでいう飼い主の責任には「動物への責任」と「社会への責任」の2つがあります。

「動物への責任」とは共に暮らす動物の健康、安全の保持、終生飼養、適正な環境の確保などその動物の一生に対する責任です。餌と水を与えているだけでは責任を果たしたことはありません。その動物の生態、生理に合った、そしてその習性が十分に発揮できる環境を整えることを忘れてはなりません。

次に「社会への責任」とは、飼っている動物が人の生命、身体、財産へ害を及ぼすことを防ぐとともに、周辺への迷惑の防止、自然環境への影響防止の責任です。このため、飼い主は、飼っている動物に対して人間社会で共に暮らす上での必要なしつけや訓練、繁殖制限等適切な管理を行うことが求められます。

「かわいがる」と「愛情」は異なります。一時の感情の発露ではなく、上記の責任の裏打ちがあってはじめて「愛情」といえるのです。飼い主責任の遂行、モラルの向上、共生への配慮が社会に行き渡ってはじめて、動物が真の意味で社会に受け入れられるようになるのだと思います。

2. 動物販売業者の責任

動物の適正な飼養保管という飼い主としての責任を果たすためになすべき基本的なことは、終生

飼養の心構えを持つことと、その動物の生態、習性、生理等を理解し、これに配慮した飼養を行うということです。そのためには、それらに関する知識、技術の修得が必要となります。

動物愛護管理法が動物販売業者に、販売に際してその動物に関する情報、適切な飼養管理のための必要な情報を購入希望者に説明するよう責務を課したのは、これをもっとも効果的にサポートしようとするものです。

したがって、この説明責務は、動物の販売業の社会的な責務として、動物販売業を営む者すべてに課せられています。法第8条による届け出義務を課せられている動物取扱業者だけでなく、例えばインターネットなどを用いた仲介販売業者なども含め、全ての動物販売業者に課せられているものです。

また、動物販売業を営む者がこの責務を果たすためには、経営者は購入者に対し適切な説明が行えるよう従業員に対する平素からの教育、指導が必要です。

近年、野生由来の爬虫類・哺乳類のペット動物が増えています。これら野生由来の動物については、生態や習性、飼養方法などがあまり知られておらず、また、犬や猫などの家畜と異なり、人と生活を共にした種としての歴史的経験が浅いか、全くないものが多く、その飼養は難しいものであること、譲渡が難しく、家畜以上に人と動物の共通感染症に注意が必要であること等を説明する必要があります。「家庭での飼養に向かない動物」、「購入者の飼養能力を明らかに超えると思われる動物」が、熟慮されることなしに安易に購入されることがないように、販売者としての社会的役割、責任を踏まえた積極的な姿勢が望まれるところです。

なお、本マニュアルで取り上げられなかった動物種についても、販売に当たっては説明の責任はありますので、業者は販売する動物全てについての生態、習性、生理や適切な飼養管理方法等について資料等を揃え、修得しておく必要があります。

II. 共通事項

1. 動物購入者が種類や品種を選ぶために必要な情報

動物を飼い始める前に、飼い主は飼養目的と飼養環境条件を考えながら、動物の選択を行うこととなります。その場合、動物の生態や習性、生理、飼養方法などの特性について十分理解するとともに、住宅環境や家族構成の変化など将来的な見通しも踏まえた上で、最後まで責任を持って飼う（動物の特性に応じた飼養環境を動物が寿命を全うするまで用意し続ける）ことができるかを考えることが求められています。

(1) 動物の特性

それぞれの動物種の生態、習性、生理、食性、適応環境、知能、運動能力、力の強さ、行動パターン、気質や性質（成長に伴う変化、繁殖期の変化等も含む）、成長時のサイズ、力量、性別、犬等の品種による気質や運動要求量の差、長毛、短毛による必要な手入れの差、寿命等々できるだけ多くの特性についての情報が必要です。また、飼い主になる人との相性を見ることも大切です。

(2) 野生由来の動物飼養の特殊性

野生由来のペット動物は、長年、何世代にもわたって繁殖飼養がくり返されることにより、人と共に暮らすことに対する適応性を持つようになった動物（家畜）と異なり、人間社会で人と共に暮らすことに対する適応性は低いものです。

本来の野生における生態、生理を考え、その習性が十分発揮できるような環境条件を整備し、その中で適切な給餌、給水が必要です。また、幼獣の時は人に馴れたように思っても成長するにしたがって本来の野性が出て人馴れしない動物も多いのです。

さらに、世界には多くの人と動物の共通感染症がありますが、野生動物は、どのような病原体を持っているかわかりません。さらに、遺棄等により野生化した動物が生物多様性への影響を起している例も全国各地で見られます。その他、譲渡も難しいなど、飼養を途中でやめることは簡単にはできないと考えるべきです。このため、「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」では、野生動物を飼う前に慎重に判断するよう求めています。これらのことを考えあわせるとほとんどの野生由来の動物は、ペットとして飼うのは容易でなく、リスクと大きな責任を伴うことを理解させるべきです。また、飼うこと自体が動物の心身に多大なストレスを与えることを認識しておかなければなりません。

それでも家庭で飼養する場合には相当の知識、技術、設備、環境ならびに覚悟が必要であることを十分理解させるべきです。

(3) 飼養環境

飼養空間

動物種によって、行動上必要な広さの空間は異なります。

住宅環境

一戸建か集合住宅か、持ち家が賃貸か、ペット動物飼養可か不可か、家の広さ、自宅の周辺環境等諸条件を確認する必要があります。最近ではペット動物飼養可能な集合住宅が増えてきてはいますが、まだ不可のところも多く、不可のマンションで飼養している犬や猫を処分するよう管理組合から勧告されたり、裁判になったりすることもありますので、飼養予定場所や住宅環境を確認することも飼養放棄を未然に防ぐためには大切です。

その他飼養目的、家族の同意等

その他下記の事項についても確認をする必要があります。

- 1) その動物を飼う目的、飼いたい理由
- 2) 家族の同意
- 3) 家族構成とそれぞれの年齢

- 4) 家を留守にする時間
- 5) 他に飼っている動物の有無、種類、年齢、性別
- 6) 今までの飼養経験

動物を飼うにはその動物たちに適切な食物を与え、生活環境を整え、健康管理をし、また、家族全員で出かける時は誰かにその世話を頼まなければなりませんし、犬の場合はしつけもしなければなりません。毎日8～10時間、誰もいない家で子犬や子猫を飼うことは十分な世話ができませんし、また、散歩時のコントロールができない人が大型犬を飼うことは危険を伴います。

2. 終生飼養を確保するために必要な情報

飼養途中で動物を手放す主な理由には次のようなものがあります。

- (1) 転勤で転居先の住居では動物を飼養することが認められない
- (2) 婚姻や就職
- (3) 飼い主自身の病気
- (4) 鳴き声や臭いに対する近隣からの苦情
- (5) 動物の体毛、羽毛による飼い主や家族のアレルギー疾患
- (6) 動物の治療費

この他、動物の成長に伴う変化や経費の増加、犬の場合には問題行動も高い比率を示しています。また最近では、高齢の飼い主の死亡や家族が妊娠、出産するからという理由も増えてきました

これらは動物を飼い始める前に予想できる部分が多くあります。動物の成長に伴う必要な世話や健康管理、成長時の大きさや繁殖期の変化、老齢期の世話、寿命等と家族構成及び家族の年齢も合わせて考えることも大切です。10年、15年の間には家族構成が変わり、転勤、転居もあるかもしれません。引越しが予定されている場合はそれが終わって新居が片付いてから飼養を考えるべきですし、転勤が多い職業の方は転勤が落ち着くまで我慢することも愛情です。

また近年、動物の寿命の延びと人間社会の高齢化ということも考慮すべきです。高齢の方が子犬や子猫から飼うには家族のバックアップがないと難しいと思われれます。動物の寿命と飼いたい人の年齢を考えることも必要です。

3. 適正飼養を確保するために必要な情報

擬人化した飼養管理は愛情のはき違えであり、無知がなせるものといえます。

それぞれの動物種にはそれぞれの健康維持にふさわしい食物があり、本来の生態、生理に合った生活環境や、習性を十分に発揮できる居住空間が必要です。十分なスペースとストレスが蓄積しないように遊びや運動も必要ですし、安心して休める場所も必要です。

したがって、それぞれの動物種についてその生態、習性、生理を十分理解し、その動物に見合った適正な飼養保管に努めなければなりません。具体的には、動物の特性に配慮した温度、湿度、照明、居住空間の材質や床敷等の環境作り等のほか、動物の逸走防止にも心がけなければなりません。

健康管理においては予防に心がけ、毎日の手入れや観察で動物の異常の早期発見に努め、必要に応じて獣医師の診察を受けます。動物の生活環境の衛生管理も大切です。

4. 所有の明示

飼い主の責任の一つとして、飼っている動物の所有の明示があります。この所有の明示については、名札、脚環、マイクロチップ等の方法があり、このうち、マイクロチップについては、所有者を確認する新たな識別方法として生体内埋め込み方式の電子標識器具が開発されたもので、国内外で動物の個体識別のために導入されています。マイクロチップは、皮下に埋め込むことから、名札や首輪のように外れたり、とれたりする心配がなく、平常時の逸走だけでなく、緊急災害時等の混

乱状態で行方不明になった時でも発見が容易になります。

なお、犬の飼い主には、別途、狂犬病予防法に基づく登録、鑑札装着の義務があり、これを実施することは当然の義務です。

マイクロチップとは

マイクロチップ（MC）は、直径約2mm×長さ約12mmの小さな円筒形の電子標識器具です。ガラスのカプセルでできており、その中に集積回路（IC）、コンデンサー、アンテナの役割を果たすコイル等を収めてあり、ICチップとも呼ばれています。

MCに標識されているデータは、リーダーという装置を使って読み取ります。電波を発するリーダーをMCに近づけると、MCがその電波に反応して電波を送り返し、これをリーダーが感知してデータを読み取るのです。MC自体は電源を必要としないため電池の交換等は不要で、一度動物の体内に注入すれば、一生交換する必要はありません。

MCは動物病院で獣医師に注入してもらいます。注入の方法は、一般的な皮下注射とほとんど変わらないため、動物には負担をかけません。

5．繁殖制限に関する情報

犬や猫等の家畜は、自由に繁殖できる状態である場合、あっという間に頭数が増えてしまいます。ブリーダーなどのように一定の販路がある場合を除き、生まれた動物それぞれに責任ある新しい飼い主を見つけることは困難であり、一方、次々と生まれる子を全て自分の手元で飼養するのは、物理的にも経済的にも無理な場合がほとんどです。適切な飼養管理、健康管理ができず、劣悪多頭飼養者になってしまいかねません。もらい手がないからといって遺棄することは許されません。違反した場合は法律に基づき罰せられます。動物による近隣迷惑、危害、環境影響を防止するだけでなく、動物愛護の面からも不幸な命は増やさないようにすることが大切です。動物の愛護上あるいは管理上の問題の多くが、飼い主の責任による適切な繁殖制限の実施により大きく改善されます。

このため、法に基づいて定められた「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」では、自らの責任において終生飼養または確実に譲渡が可能である場合を除いて、原則として不妊去勢等の繁殖制限措置をとるよう努めるべきとしています（図表1、2参照）。

なお、不妊去勢の手術費に対する助成制度を持っている自治体もありますので、関係自治体における助成措置の有無について把握しておき、説明に加えることも重要です。

6．人と動物の共通感染症の予防に必要な情報

(1) 人と動物の共通感染症

動物から人へ、人から動物へと病原体が感染すること、またはその感染によっておこる疾病のことを「人畜共通感染症」、「人獣共通感染症」、「ズーノーシス」といっていますが、厚生労働省は、動物から人へ感染する疾病を「動物由来感染症」といっています。

(2) 感染症の種類

世界では約200種類近くの人と動物の共通感染症が数えられているといわれ、そのうち日本では数十から百種類くらいの感染症があるといわれています。

その中でペットに関係する主なものは図表3の通りです。

図表2:不妊、去勢手術のメリットとデメリット(犬の場合)	
メリット	デメリット
<p>【オス・メス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 長生きする確率が高くなる ・ 雌雄一緒に飼養が可能になる <p>【オス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前立腺の病気、精巣や肛門周辺の腫瘍などの予防になる ・ 性的欲求によるストレスから解放される ・ 攻撃性が抑えられ、温和になる ・ 無駄吠えやマーキングが減り、落ち着く <p>【メス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 望まない妊娠が避けられる ・ 子宮の病気や乳癌の予防に効果がある ・ 生理や発情時のわずらわしさとともに、発情のストレスもなくなる 	<p>【オス・メス】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 繁殖させたくなくても不可能 ・ 栄養管理等によっては肥満になりがち ・ ホルモン欠乏症による皮膚病がおこる場合がある。ただし発症率はかなり低く、有効な治療法がある
<p>手術の方法としては、オスの睾丸摘出手術、メスの卵巣、子宮摘出手術が一般的です。</p> <p>手術をする時期はいつでも可能ですが、生後6～8ヵ月頃の最初の発情前に行うのが効果的です。それ以降であってはなるべく早く手術を実施すべきです。</p> <p>不妊、去勢手術に対して「かわいそう」という声もありますが、多くのメリットがあり、人と動物の共生の上からも必要です。</p>	

図表3: ペットに関する主な人と動物の共通感染症

	病名	対象動物	主な感染経路	動物の主な症状	人の主な症状	その他	感染症の種類 (**)
ウイルス	エボラ出血熱*	サル類、終末宿主はチンパンジー	直接接触(血液、体液、糞便、尿、吐物)	サル類: 元気消失、沈うつ、食欲廃絶、出血斑(胸部、上腕内側、大腿部)、肝機能障害 感染後6~10日で100%死亡	突然の高熱、眼結膜炎、咽頭痛、関節痛、筋肉痛、頭痛、腹痛、嘔気、嘔吐、下痢、消化管出血傾向、黄疸、肝機能障害、多臓器不全	現在のところ対症療法以外には特異的効能を示す薬剤はない	第1類感染症
	マールブルグ病*	サル類、終末宿主は霊長類	直接(血液、尿、糞便、吐物)	サル類: 感染後3週間程度で発症。出血熱。100%死亡	突然の高熱、頭痛、筋肉痛、胃腸障害、吐気、嘔吐、頻繁な水様下痢、鼻口腔、消化管出血、肝機能障害、腓	通常ではヒト ヒトへの感染はない	
	ラッサ熱*	マストミス(げっ歯類)	直接(咬傷、尿、糞便、体液、血液、吐物) 飛沫(塵埃)	不明	発熱と 怠感、高熱、頭痛、筋肉痛、腹痛、下痢、発疹、重症では出血傾向	通常ではヒト ヒトへの感染はない	
	クリミア・コンゴ出血熱*	野生哺乳類や家畜(ウシ、ウサギ、ヒツジ等)、鳥類	直接(咬傷、血液、体液、吐物) 直接接触 媒介: マダニ	ウイルス血症を起こすが発病しない	突然40 を超える発熱、頭痛、筋肉痛、上部腹痛、結膜炎、口中の出血、下痢、肝機能障害	通常ではヒト ヒトへの感染はない	第4類感染症
	狂犬病	犬、猫、アライグマ、キツネ、スカンク、吸血コウモリ、ハムスター	直接(咬傷)	よだれ、意識障害、狂躁又は全身麻痺、昏睡後死亡(100%)	不安感、恐水症状、興奮、麻痺などの神経症状、発症後は昏睡、呼吸障害、死亡(100%)	犬: 年1回の予防接種の法義務 ヒト: 咬傷時石けんで洗浄 ワクチン接種	
	腎症候性出血熱(HFRS)	野ネズミ、ドブネズミ、高麗セズミ、ヤチネズミ等	直接(咬傷、尿、糞便) 飛沫	無症状(げっ歯類)	ハンタ型のウイルスは重症のHFRSを起こす。突然の発熱、頭痛、腹痛、出血傾向、腎不全	ウイルス株により感染性に違いがある。通常ではヒト ヒトへの感染はない	
	Bウイルス病*	東南アジア産マカ属サル類(カニクイザル等)	直接(咬傷、引っかき傷、だ液)	口腔粘膜の水疱、重篤な病気は起さない	傷口の発赤、腫脹、水泡形成、頭痛、嘔下困難、麻痺等の脳神経症状、発熱、脳炎症状を起こす		
ウエストナイル熱/脳炎*	野鳥、ウマ、その他哺乳類(犬、猫、コウモリ、リス、スカンク、ウサギ)	直接(咬傷) 媒介: 蚊(イエカ、コガタアカイエカ)	鳥類: 通常は症状を示さない。大型猛禽類、カラス、カケス、サギ類等で感受性高い。ニワトリ、スズメ等小型鳥類は感受性が低い。犬、猫等小動物はひどい症状は起さない。ウマでは致死的な脳炎を起こすことがある	突然の発熱(39度以上)、頭痛、筋肉痛、時に消化器症状、リンパ節腫脹、発疹(胸、背、上肢)、多くは1週間で回復、怠感が残ることも多い	約80%が不顕性感染 ヒト ヒト感染はない		
細菌	ペスト*	げっ歯類	腺ペスト: 直接(咬傷) 肺ペスト: 飛沫(吸入) 媒介: ノミ	猫以外はほとんど無症状	腺ペスト: ヒトペストの80~90%を占める。発熱、頭痛、リンパ腺腫脹、自潰、敗血症 高熱 肺ペスト: 高熱、咳、漿液性血瘍、重症の肺炎。腺ペストからの移行	腺ペストは膿に触れなければヒト ヒトへの感染はない。肺ペストの極期は強い感染力を有す。わが国においては1926年以降ペスト患者の報告なし	第1類感染症
	細菌性赤痢	霊長類	経口(飲食物を介して。患者、保菌者の糞便)	発熱、下痢、急性大腸炎	急激な発熱、下痢、しぶり腹、急性大腸炎(粘血便)	サルが下痢をしたら注意	染第2類
	腸管出血性大腸菌感染症	ウシ、ヒツジ、シカ	経口(飲食物を介して)	無症状	腹痛、水様性下痢、血便、溶血性尿毒症症候群。乳幼児、高齢者は重篤傾向		第3類
	ブルセラ症	犬、ウシ、ヤギ、ブタ、ヒツジ	接触(血液、乳汁、尿、胎盤)	流産、精巣炎、陰囊皮膚炎	インフルエンザ様症状、波状熱	流産した犬は要注意(獣医師の検診を)	感第4類
	野兎病	野生げっ歯類(ウサギ、ネズミ)、野鳥	直接接触(血液) 間接(蚊、サシバエ、アブ、マダニ) 経口(汚染生水、野ウサギの調理不十分)	不明	発熱、悪寒、関節痛、菌の侵入箇所のリンパ節腫脹	ヒト ヒト感染はない	
	レプトスピラ症	犬、ネズミ、家畜(ウシ、ブタ等)	経皮(尿に接触、たまたに経口)	腎炎。げっ歯類は無症状が多い	発熱、筋肉痛、眼球粘膜出血、黄疸、出血	犬ワクチン有効、水系環境要注意、乾燥は予防に有効	
	パストレルラ症	犬、猫、家畜(ウシ、ブタ等)	直接(咬傷、引っかき傷)	無症状が多い	傷口が腫れて痛む。軽症。発症した場合は上部気道炎、気管支炎、肺炎を起こすこともある。死亡例なし。予発熱、下痢、嘔吐等の急性胃腸炎	犬、猫の口腔内正常細菌叢。菌の保有率: 犬75%、猫97%(猫の爪20%)傷は石けんでよ	
	サルモネラ症	犬、猫、ニワトリ、ミドリガメ、家畜(ウシ、ブタ等)	経口(飲食物を介して)	無症状が多い	発熱、下痢、嘔吐等の急性胃腸炎	特にカメの保菌率は高い	
	カンピロバクター症	犬、猫、鳥類	経口(飲食物を介して)	無症状が多い	発熱、粘血便を伴う腸炎		
	仮性結核	犬、猫、霊長類、偶蹄類	経口(飲食物を介して)	無症状が多い	胃腸炎、虫垂炎、泉熱様疾患、発熱、発疹		
	エルシニア・エンテロコリチカ感染症	犬、猫、ネズミ、ブタ	経口(飲食物を介して)	無症状が多い	頭痛、咳、咽頭痛などのかぜ様症状、腹痛、吐気、嘔吐、胃腸炎、下痢、虫垂炎、関節炎		
	猫ひっかき病	猫	直接(咬傷、引っかき傷)	無症状が多い	リンパ節の腫れ、発熱、ほとんど軽症	特に子猫は注意	
	リケッチア・クラミジア	Q熱	野生動物、鳥類、ウシ、ヤギ(偶蹄類)、愛玩動物	直接(経口)、吸入(汚染塵埃、汚染獣皮、汚染毛皮類、乳汁、尿、糞便)	無症状が多い、流産	インフルエンザ様症状、悪寒、戦慄を伴う急激な発熱、頭痛、食欲不振、全身 怠、気管支炎、肝炎、髄膜炎、心内膜炎	ダニからの感染も有
オウム病		鳥類(セキセイインコ、オウム、ハト等)	吸入(糞便、だ液)	下痢、元気消失。ヒナや若鳥では症状が重く、成鳥では無症状が多い	インフルエンザ様症状、突然の発熱、咳嗽、全身 怠感、食欲不振、筋肉痛、頭痛、関節痛	口移しでの餌やり禁止	
原虫	トキソプラズマ症	猫、犬、家畜(ブタ、ヒツジ)	経口	猫: 全身感染、肺炎、腸炎、脳炎 犬: 下痢、ジステンパー類似症状	不顕性感染がほとんど。急性の場合、発熱、脈絡網膜炎、脳症状。先天性の場合、上記症状以外に脳水腫、水頭症、発育障害	無症状感染も多い。妊婦は特に注意	
真菌	真菌症(皮膚糸状菌症)	犬、猫	接触	脱毛、フケの発生、皮膚の肥厚、痂皮形成	軽度の脱毛等の皮膚障害、かゆみを伴う	感染動物は隔離、治療。部屋の清掃は必要	
寄生虫	エキノコックス症	犬、キツネ	経口(飲食物を介して虫卵が口に入る) 媒介: ネズミ	無症状が多い	上腹部の不快感、膨満感、腹痛、肝機能障害、腹水、黄疸、重度の肝機能不全	人では10年以上経っての発症もある	感第4類
	回虫症(幼虫移行症)	犬、猫	経口(糞便中の虫卵が口に入る)	子犬、子猫: 食欲不振、下痢、おう吐 成犬、成猫: 無症状が多い	幼児で肝臓、脳、目等に障害	犬、猫に触ったり、砂場等で遊んだ後の手洗い励行	
	疥癬症	犬、猫	接触	皮膚の強いかゆみ、脱毛	皮膚の強いかゆみ、脱毛		

* 印: わが国で病原体がいます、もしくは長期間発見されていない病気

** 印: 感染症の種類

[参考文献・資料・ホームページ]

1. 動物由来感染症ハンドブック: 厚生労働省健康局結核感染症課編、2002
2. 動物由来感染症: 厚生省生活衛生局乳肉衛生課編
3. 厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/>
4. 厚生労働省検疫所 <http://www.forth.go.jp/>
5. 国立感染症研究所感染症情報センター <http://idsc.nih.go.jp/index-j.html>
6. 人と動物の共通感染症研究会 <http://www.hdkkk.net/>

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」により、感染力、罹患した場合の重篤性に基づく総合的な観点からみた危険性と対応の内容及び必要度により、その高い順に第1類から第4類に区分、類型化されている。

(3) 予防のための注意（予防方法）

人と動物の共通感染症のほとんどは日頃の注意で防ぐことができます。必要以上にこわがることはありませんが、次のことに気を付けましょう。

飼養環境の管理

1) 動物の飼養場所の清掃等

ケージ（食器類も）や施設全体の定期的清掃及び定期的消毒の実施。

2) 餌（飼料）、水の管理

新鮮なものを適量与え、長時間放置しない。また、餌（飼料）の保管も適正に行う。（特に開封後のものや要冷蔵のもの）

3) 外界動物との接触（侵入防止）

他の飼養動物との接触防止（疾病、ノミ、ダニ等の感染）、野生動物（野鳥、ねずみ等）及び昆虫類（ハエ、ゴキブリ、蚊など）の侵入・接触の防止並びに駆除。

飼養動物の健康管理

・体調の管理（チェック）

健康な状態の理解と異常の早期発見のため、気をつけて観察する必要があります（図表4参照）。感染症によってはすぐに症状を示さない場合もあるので常に観察が必要です。また、幼齢動物は購入等直後にはストレスがかかるので注意することが必要です。

飼養動物との（過度の）接触等

1) 手洗い等身体の清潔保持

飼養動物の世話の前後には手洗いやうがいを行います。また、衣服等に毛や汚れがついたら清潔に保つようにします。

2) 過度の接触

餌の口移し、一緒の就寝、取扱作業場所での食事などは避けます。

3) 動物等により傷を負った場合

速やかに傷口を流水、石けんで十分に洗浄後、消毒します。必要に応じて医療機関で受診します。（犬による咬傷の場合は保健所に届け出ます。）

4) 飼養者が体調不良

健康状態の良くない人には、飼養動物の取り扱いを行わせないようにします。（人の健康チェックも必要です。）

(4) 消毒方法

「消毒」とは、感染症を防ぐために病原微生物を物理的、化学的方法で死滅させるか感染力を失わせることです（図表5参照）。

飼養動物のチェック項目		対 処
<ul style="list-style-type: none"> ・ 元気、食欲はあるか ・ 鳴き声、呼吸の状態はいつもと同じか ・ せき、くしゃみをしていないか ・ 毛のつやはよいか(逆立ったり、抜けたりしていないか) ・ 目やに、耳だれ、鼻水などはでていないか ・ 排泄物(フン、尿等)の状態は正常か(色調、下痢、血便、寄生虫の有無など) ・ 発熱はないか 	異常を 発見した時	<ul style="list-style-type: none"> 【飼養動物】 ・ 健康な動物とは隔離して飼って下さい。 ・ 必要により動物病院で受診して下さい。 【飼養者、接触者】 ・ 飼養者の体調もすぐれない場合は診療施設で受診します。(ペットを飼っていること、ペットの種類・期間等を告げて下さ

図表5:代表的な消毒方法と特性

消毒法(消毒薬)	消毒方法	特性	対象微生物	代表的薬剤名(製品名)
熱湯消毒	80度、5秒以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 簡単、安価、残留性無 ・ より高温、長時間で高効果あり ・ 熱に弱い素材には不適 食器、布類、床、壁等に適 	一般細菌に有効 (条件によりウイルス等にも有効) 芽胞は無効	
煮沸消毒	100度、10分以上	<ul style="list-style-type: none"> ・ 簡単、安価、残留性無 ・ より長時間で確実性があがる ・ 熱に弱い素材には不適 ガラスや金属製の食器、器具、布類等に適 	細菌、真菌、ウイルスに有効 (芽胞細菌は無効)	
逆性石けん	洗浄、浸漬	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低毒性、分解しにくい(安定性) ・ 手指などの使用に適 ・ 布類の消毒には不適 ・ 有機物により効果低下 手指、皮膚、床、壁、器具等に適 	細菌に有効 (MRSA含) ウイルスは無効	塩化ベンザルコニウム
アルコール類	塗布、噴霧	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低毒性、使用法簡易 ・ 汚れを残さない(脱脂作用) ・ 引火性有、蒸発性高い ・ プラスチック、ゴムの一部を変質 手指、皮膚、ガラスや金属の器具の表面等に適 	細菌、真菌に有効 芽胞、ウイルスに無効	消毒用エタノール
グルコン酸クロルヘキシジン	塗布、浸漬	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低毒性、低腐食性 ・ アルコール併用可 ・ 粘膜への使用不可(耳、目も) ・ 石けん分があると効果低下 獣医師と相談して使用 	細菌、真菌に有効 結核菌、芽胞、ウイルスは無効	ヒピテン液
塩素剤	塗布、噴霧、浸漬	<ul style="list-style-type: none"> ・ 低毒性、安価、低残留性 ・ 分解しやすい(不安定性) ・ 金属腐食、刺激臭、脱色性有 布類、水、食器、床、壁等に適 	細菌、真菌、ウイルスに有効 結核菌、一部の真菌無効	次亜塩素酸ナトリウム
クレゾール	塗布、洗浄	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安価、有機物があっても有効 ・ 臭気が強い、損傷皮膚には不可 排泄物、床、壁等に適 	細菌、真菌に有効 芽胞、ウイルスに無効	クレゾール石けん
ヨウ素剤	塗布	<ul style="list-style-type: none"> ・ 皮膚、粘膜、傷への使用可 ・ 分解しにくい(安定生)(日光、有機物で分解) ・ 着色性、金属腐食性有 ・ 過敏症を起こす可能性有 獣医師と相談して使用 	細菌、真菌、ウイルスに有効 (一部の芽胞、ウイルス除く)	ポピドンヨード
過酸化水素	塗布	<ul style="list-style-type: none"> ・ 傷、潰瘍への使用可 ・ 発泡による機械的洗浄作用有 手指、皮膚(傷、潰瘍)等に適 	一般細菌に有効	オキシドール
グルタール(アルデヒド系)	噴霧、浸漬	<ul style="list-style-type: none"> ・ 人体に使用不可(劇薬指定) ・ 金属腐食、刺激臭 獣医師と相談して使用 	細菌、真菌、ウイルスに有効 結核菌、芽胞にも有効	サイデックス ステリハイド グルタールZ
<p>消毒のポイント: 消毒薬は汚れを落としてから。 消毒薬の使用温度は「室温」が効果的。 消毒薬は適正な濃度と消毒時間を守る。 消毒薬の有効期限を確認。 消毒薬の保管場所に注意。 使用に不安、疑問があるときは必ずメーカー、獣医師、薬剤師に相談すること。</p>				
<p>【参考文献・資料・ホームページ】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 消毒と滅菌のガイドライン: 厚生省保健医療局結核感染症課監修、ヘルス出版、1999 2. 伝染病予防必携 第2版補訂版 : (財)日本公衆衛生協会、1979 3. 愛知県衛生研究所 http://www.pref.aichi.jp/eiseiken/ 				

7. 逸走と危害の発生を防止するために必要な情報

飼い主は、飼っている動物が逸走することによって、人や社会に対して迷惑や危害をおよぼすことのないように心掛けなければなりません。

動物の逸走と危害の防止について「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」は次のことを飼い主の責任として定めています。

- ・飼養施設は、家庭動物等の逸走の防止に配慮した構造とすること。
- ・飼養施設の点検等、逸走の防止のための管理に努めること。
- ・逸走した場合には、飼い主等が自らの責任において速やかに捜索し捕獲すること。

さらに、人に危害を加えるおそれのある動物を飼う場合には、

- ・飼養施設は、動物が脱出できない構造とすること。
- ・飼養施設を常時点検し、必要な補修、施錠の確認をするなど管理に万全を期すこと。
- ・動物逸走時の措置についてあらかじめ対策を講じ、また捕獲等のための機材を常備すること。
- ・万一逸走した場合には速やかに関係機関、近隣住民へ通報、周知すること。

としております。

なお、人の生命、身体又は財産に害を加えるおそれがある動物については、動物愛護管理法施行令において動物種が指定され、都道府県等では、条例により危険防止のための規制を実施しています。しかしながら、外国からの移入野生動物のペット化など、ペット動物が多様化する中で、規制対象動物以外の動物であっても危害性を持つものがあることが考えられることや、同じ種の動物であっても、例えば闘犬のように攻撃性が強い性質を持つものや咬傷癖のあるものもいることに留意し、これらについては特にこの管理に注意する必要があります。

8. 生物多様性保全の見地から必要な情報

生物多様性とは、地球上の生物の多様さと、その生息環境の多様さ、言い換えれば生物種、生態系および遺伝子の多様性をいうもので、生態系は多様な生物が生息するほど健全であり、安定しているということです。

熱帯雨林の急速な減少、種の絶滅の進行等世界的危機感のもとに採択された「生物多様性条約」を批准したわが国では、平成14年3月に「新・生物多様性国家戦略」を策定しました。この新国家戦略は、生物多様性の保全と持続可能な利用を目的としています。

この新国家戦略では、生物多様性の3つの危機の1つに、移入種（外の地域から持ち込まれた動植物）による生態系の攪乱を挙げており、ペットの遺棄や逸走による移入種の増加を指摘しており、ペット動物の適正な飼養保管が求められています。

わが国には20万から30万ともいわれる種類の動植物が生息していますが、この中には沖縄のヤンバルクイナの例に見られるようにマンゲースやノネコの影響で絶滅の危機に直面している動物もいます。

人と動物が共生できる社会を実現していくためには、飼い主はひとたび飼養動物が逸走したり、あるいはこれを遺棄した場合、人の生命、身体、財産への害、人への迷惑などのほか野生動物の捕食、圧迫、在来種との交雑等生物多様性保全上の影響が大きいことを十分理解して慎重に飼う必要があります。

(1) 購入者への説明事項

動物を遺棄しないこと〔法律違反であり罰則（50万円以下の罰金）があること、生態系への影響の説明〕

動物を逸走させないこと〔近隣への迷惑、危害防止について、生態系への影響の説明〕

動物は終生飼養すること〔不測の事態（飼えなくなった場合等）の相談、説明〕

動物の適正な飼養、管理方法の説明〔生態、習性及び生理等の基本知識を含めて〕

(2) わが国において問題となっているペット動物による生態影響の事例（図表6）

図表6

動物種	< 影響の種類 >							人への影響	
	生物多様性への影響					影響を受ける地域の特性			
	< 影響の評価項目 > (影響を評価する際の主な視点)								
	影響のタイプ(種の特性)				生態系の攪乱				
	生態系の攪乱			遺伝的な攪乱					
捕食	競争・駆逐	土壌環境等の攪乱	希少・固有生態系、種		影響が生じている地域				
[哺乳類]									
カイウサギ							七ツ島(石川県)		
タイワンリス									
チョウセンシマリス									
アライグマ							北海道		
ノネコ							沖縄島、対馬		
[鳥類]									
ワカケホンセイインコ									
[爬虫類]									
カミツキガメ									
ミシシippアカミミガメ									

：国内で影響が確認されたもの

：(海外で影響が確認されるなど)国内でも影響を及ぼす可能性がある

(参考:環境省『野生生物保護対策検討会移入種問題分科会』資料)

III . 動物種ごとの個別事項

1 . 犬<食肉目イヌ科>

(1) 分類、品種、特性

犬は食肉目イヌ科に属し、もっとも古い家畜です。現在、地球上で飼われている犬種はおよそ350以上あり、わが国でも150犬種ほどが飼われていると推定されています。体重1kgに満たない超小型犬種から50kgを超える超大型犬種まで、大きさや外観は変化に富んでいますし、それぞれの犬種には目的に合わせて選択繁殖が行われてきた歴史があり、外見だけではなく、行動や性格にも特徴が認められます。犬の能力を発揮して活動している警備犬、麻薬探知犬、災害救助犬、猟犬などや、盲導犬、聴導犬などの障害者補助犬のほか、ほとんどの犬はコンパニオンドッグとして家庭で飼養されています。

犬を飼うにあたっては、ただ外見や大きさなどの見た目だけで選ぶのではなく、その犬種の性格や能力など「犬種の特性」を理解して選択することが大切です。同じ犬であっても、犬種によって、大きさだけでなく、その性格や、飼養の際必要となる運動量など、大きく異なります。飼養環境、目的、飼養管理の能力にあった犬種であるかどうか理解させる必要があります。犬種の特性は外観では判断できないものなので、初めて犬を飼う人には特に十分な説明が必要です。

日本でよく見られる犬種についての大きさや特性は図表7の通りです。

図表7:犬種別特性一覧表

No	犬種名	大きさ(成犬)		被毛	適性・性格			訓練性
		体重(kg)	体高(cm)		興奮しやすさ	攻撃的性格	運動量	
1	チワワ	1~3	16~23	短長	高	高		中
2	ポメラニアン	2~5	13~30	長	高	中		低
3	ヨークシャー・テリア	2~4	18~23	長	高	中		低
4	パピヨン	2~5	20~30	長	高	中		中
5	マルチーズ	2~4	20~30	長	高	中		低
6	狆(チン)	2~4	17~30	長	中	中		低
7	ミニチュア・ピンシャー	2~5	25~32	短	高	中		中
8	イタリアン・グレーハウンド	3~5	32~38	短	中	中		中
9	ブリュッセル・グリフォン	3~6	21~28	ワ	高	中		中
10	トイ・プードル	3~7	25~28	長	高	中		高
11	ミニチュア・ダックス・フンド	3~5	12~23	短長ワ	高	高		中
12	日本テリア	3~5	25~35	短	高	中		中
13	ビション・フリーゼ	3~5	23~31	長	高	中		中
14	ペキニーズ	3~7	15~25	長	中	中		低
15	シー・ズー	4~9	20~28	長	中	中		中
16	ラサ・アプソ	5~7	25~28	長	中	中		中
17	パグ	6~9	25~35	短	中	中		低
18	日本スピッツ	5~8	25~38	長	高	中		中
19	ミニチュア・シュナウザー	6~8	30~36	ワ	高	高		中
20	ウィペット	5~13	43~55	短	中	高		高
21	ケアーン・テリア	6~8	20~30	ワ	高	高		中
22	ウエスト・ハイランド・ホワイト・テリア	5~9	20~30	ワ	高	高		中
23	ジャック・ラッセル・テリア	6~9	22~38	短ワ	中	中		中
24	ボストン・テリア	5~12	35~45	短	高	中		低
25	キャバリア・キング・チャールズ・スパニエル	5~10	30~40	長	中	低		高
26	フォックス・テリア	6~10	35~40	短ワ	高	高		中
27	柴犬	6~10	35~42	短	高	高		中
28	シェットランド・シープドッグ	6~13	33~41	長	高	中		高
29	ビーグル	7~14	30~43	短	高	中		低
30	アメリカン・コッカー・スパニエル	7~13	33~40	長	高	中		低
31	スコティッシュ・テリア	8~11	20~30	ワ	高	高		中
32	パセージ	9~11	40~43	短	中	中		中
33	ミニチュア・ブル・テリア	9~15	25~35	短	高	高		低
34	ウェルシュ・コーギー	8~14	23~35	短	高	中		高
35	フレンチ・ブルドッグ	8~17	25~40	短	高	高		中
36	甲斐犬	11~23	39~53	短	高	高		中
37	イングリッシュ・コッカー・スパニエル	12~15	36~41	短長	高	中		低
38	サルキー	13~30	56~71	短	低	中		低
39	ボーダー・コリー	14~23	45~56	短長	高	中		高
40	アイリッシュ・セター	15~32	52~69	長	高	中		中
41	シャー・ペイ	16~25	41~51	短	中	高		低
42	シベリアン・ハスキー	16~28	51~60	短	中	高		低
43	パセット・ハウンド	18~30	28~38	短	低	低		低
44	エアデール・テリア	18~27	55~65	ワ	高	高		中
45	チャウ・チャウ	18~32	46~60	長	低	高		低
46	ブルドッグ	22~25	30~36	短	低	低		低
47	イングリッシュ・スプリングー・スパニエル	20~24	48~51	長	高	中		高
48	ピアデッド・コリー	18~30	50~57	長	低	低		高
49	コリー	20~34	51~66	短長	低	低		高
50	ダルメシアン	20~30	48~61	短	中	高		中
51	アフガン・ハウンド	23~35	61~75	長	低	中		低
52	ドーベルマン	23~40	61~71	短	中	高		高
53	サモエド	23~30	46~60	長	低	高		低
54	ブル・テリア	20~30	50~56	短	高	高		低
55	ボクサー	25~36	53~64	短	高	中		中
56	フラットコーテッド・レトリバー	25~36	56~61	長	低	低		高
57	ラブラドル・レトリバー	25~35	52~65	短	低	低		高
58	ゴールデン・レトリバー	25~36	51~61	長	低	低		高
59	ジャーマン・シェパード・ドッグ	26~42	51~70	短	低	高		高
60	ワイマラナー	23~40	55~70	短	中	中		中
61	秋田犬	31~50	57~71	短	中	高		中
62	オールド・イングリッシュ・シープドッグ	30~41	53~65	長	低	低		低
63	ボルゾイ	34~48	66~85	長	低	中		中
64	アラスカン・マラミュート	34~57	58~71	短	低	高		低
65	バーニーズ・マウンテン・ドッグ	35~50	58~74	長	中	低		中
66	ロットワイラー	41~50	58~69	短	低	高		中
67	グレート・ピレニーズ	41~57	61~82	長	低	高		中
68	グレート・デーン	45~77	70~90	短	低	高		中
69	ニューファンドランド	50~68	66~71	長	低	低		高
70	セント・バーナード	50~90	63~85	短長	低	高		低

参考文献:「SELECTING A SUITABLE DOG FOR AN OWNER」
 VSAVA(飼い主に合った犬種の選択について:世界獣医学会)(1995)茂木利夫

短:ショートヘア
 長:ロングヘア
 ワ:ワイヤーヘア

体高とは:犬が立った状態で、首の付け根の肩甲骨上端から地面までの高さをいう
 体長とは:肩端または胸骨端から後躯の坐骨端までの長さをいう

これらの純血種の他に、いわゆる「雑種」の犬たちがいます。これらの犬は両親犬が同種でない交配から生まれた犬で、外見的に両親が推定されるような個体から、全くそれらしい特徴のない個体まで様々ですが、性格が温和で人懐こいすばらしい家庭犬がたくさんいます。

(2) 習性、生理

寿命

犬の寿命は飼養環境や食餌の向上、感染症等に対するワクチン接種などによって延びています。犬種や個体によってかなり差はありますが、「犬の平均寿命は10歳（1994年）」といわれていたものが最近では15歳、さらには20歳を超えるものも珍しくなくなっています。大型犬は小型犬に比べて寿命が短い傾向にあるといわれています（図表8参照）。

図表8：犬の年齢	
幼齢期	1～6ヵ月齢
若齢期	6ヵ月～1歳
壮齢期	1～5歳
熟齢期	5～10歳
老齢期	10～13歳
高老齢期	13歳～
老齢期に入る年齢は犬のサイズによって異なります。 小型犬(～9kg) 9～12歳 中型犬(9～22kg) 9～11.5歳 大型犬(22～40kg) 7.5～10.5歳 超大型犬(40kg～) 6～9歳	

習性

オオカミを祖先とする犬は、オオカミと同様に群れで生活を営み、リーダーに従属し、順位制が尊重される社会が形成されます。家庭に迎えられた犬たちは家族を群れとして認識して行動しますから、この習性を理解して犬のしつけを行うことが大切です。

1) テリトリー

犬は自分のテリトリー(縄張り)を大切にします。テリトリーを守ることは、吠えたり、攻撃的な行動をとることで表されます。

2) 鳴き声

犬が鳴くのは必ず何か理由があります。支配的な威嚇、恐怖、苦痛、学習、興奮、不安などの理由があり、犬にとって無駄、無意味な鳴き声というものはありません。

鳴き声は犬の特性上、社会的に容認される程度であれば一般的に問題になりませんが、特に住宅地などでは近所からの苦情となるケースが多く見受けられます。このような場合には、飼い主は犬が鳴く理由を取り除かなければなりません。

生理

平均10～12ヵ月齢で性成熟に達します。メス犬の発情期は年2回、ほぼ6ヵ月周期で見ら

れ、妊娠すれば9週後(60日から63日頃)に子犬が誕生します。出生子数は小型犬種では数頭ですが、大型犬種では10頭近く生まれることも珍しくありません。

3週齢の終わり頃から4週齢に離乳食を少しずつ食べるようになり、6週齢頃には母乳に依存せず、離乳食に完全に切り替えます。

離乳食を食べ始めれば、子犬は母犬から独立して生活でき、譲渡可能にはなりますが、同胎の「きょうだい犬」ともしばらくは一緒に過ごしながら犬特有の社会生活のルールを学習して、いわゆる「社会化」を身に付けることが大切です。

社会化期

社会化というのは、相手を社会的存在として受け入れて、付き合っていけるような正常な行動がとれることをいいます。

生後約3週齢～12週齢までを社会化期といい、子犬の初期の発達段階の中でも特に重要な時期といわれています。この間、母犬と飼い主である人間の愛情が十分に注がれ、また同胎犬とのふれあいや他の人間や犬、繁華街などの雑踏、車などいろいろな環境刺激に慣れさせれば、しつけやすい犬となり、すばらしい家庭動物としての基礎が築かれ、問題行動の予防にもつながります。

このことから「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」では、子犬の譲渡に当たっては、特別な場合を除き、離乳前に譲渡しないように努めるとともに、その社会化が十分に図られた後に譲渡するよう努めること。また、譲渡を受ける者に対し、社会化に関する情報を提供するよう努めることとしています。

(3) 飼養上必要な設備、機材及び環境など

大型犬は屋外犬、屋内では小型犬という今までの考え方が最近ではかなり変化が見られるようになってきました。

室内飼いであっても、犬は犬専用の寝床(専用のソファ)やケージ内で寝かせる「しつけ」も必要で、犬嫌いの人の訪問時や、犬をゆっくり休息させる上でも大切なことです。屋外飼養で犬舎を置く場合には、外来者の出入りの多い場所は避けて家族の居室に隣接したところに置くようにします。庭に放し飼いにする時には、犬が外へ脱出しないように塀や垣根の構造には十分注意しましょう。繋いで飼う場合、短い鎖でけい留し、犬の運動を拘束するのは虐待に等しいことになるので禁止したいものです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

食事と栄養管理

犬はもともと肉食動物ですが、長い間、人間と密着した生活を続けてきたため、現在では雑食性になっています。しかし、犬と人とは栄養素の必要量にかなり違いがあるので、人と同じ食事を与えてはいけません。たとえば、犬の場合、タンパク質は人間の4～5倍、カルシウムは10倍必要で、逆に塩分は1/3以下、野菜も少量でかまいません。

この栄養バランスを考えて作られているのが、ドッグフードです。手作り食の場合は、肉を中心に、その他の食物で足りない栄養素を補うこととなりますが、栄養士でない限り、

犬の栄養を満たす食事をつくるのは難しいことです。子犬の頃からドッグフードに慣れさせておきましょう。

ドッグフードを選ぶ際はそれぞれの特徴をよく知り、犬の体調や嗜好、成長などに応じて選びます。例えば、経済性、使いやすさで選ぶならドライタイプが最適です。ウェットタイプの缶詰やレトルトは犬の嗜好性という点で優れています。

ドッグフードの内容表示には食事の目的や内容量、与え方などが明記されていますが、主食には「総合栄養食」と書いてあるものを選び、与える量は、パッケージの表示に従います。また、幼犬用、成犬用等、成長段階に応じたものを与えましょう。

犬の食事は全てドッグフードでも構わないのですが、もうちょっと手をかけたいという場合には、手作り食を検討してみてもよいのですが、犬に必要な栄養をバランスよく配合するのは、簡単なことではありませんので、副食としてドッグフードに調理した肉や野菜を混ぜてあげたり、ときどき手作り食を与えるという程度にとどめておきましょう。

与えてはいけない食物：玉ねぎ、長ねぎ、にら、生の魚介類、鶏・魚の骨、乳製品、甘いもの、塩辛いもの、香辛料のかかったもの、生卵、アルコールなど。

運 動

屋外へ散歩に出るのは運動が必要ということだけでなく、環境に適応し、心理的な発達や社会性を養う上で大切です。

散歩中は首輪が抜けないように、引き綱(リード)も犬の大きさに適合したものを選んで犬が放れて事故に遭わないよう、また、通行中の人や他の犬に危害を与えないように十分注意しましょう。

しつけの基本

人が常にリーダーシップをとって犬の行動をコントロールすることが「しつけ」の基本です。

家庭犬として飼われている犬種では、子犬の時から主従関係をしっかり認識させ、理想的には、家族の最下位に犬が位置するように接すれば飼い主の要求に従う犬に育ちます。

「尊敬されるリーダーになる」ように厳しくしつけ(ただし体罰は絶対に避ける)、できたら大仰に褒める、というのが「しつけ」を成功させるコツです。生活していく上で、人間にとって不都合な犬の行動は、早めに制御して修正しましょう

迷惑防止

ペット飼育による迷惑なことについては、平成12年に総理府が実施したアンケートの調査結果(図表9)の通りですが、この中でトップを占めているのは「散歩している犬のふんの放置」、次いで「鳴き声がうるさい」です。

図表9：ペット飼育による迷惑(複数回答) 動物愛護に関する世論調査 (総理府実施平成12年6月調査)	
該当者数	2,190人
散歩している犬のふんの放置など飼い主のマナーが悪い	58.10%
猫がやって来てふん尿をしていく	40.90%
鳴き声がうるさい	36.10%
犬の放し飼い	30.90%
悪臭がする	21.80%
咬まれるなどの危害を加えられるおそれがある	16.90%
寄生虫や人と動物の共通感染症がうつされる心配がある	13.70%
その他	0.50%
特になし	11.80%
わからない	0.50%

ペットフード工業会のアンケート調査(平成13年)によると、犬の排泄場所はどこかという問いに対して、室内17.0%、自宅敷地内26.9%、敷地外・散歩中は実に55.8%との回答で、犬の運動、散歩は排便目的も兼ねたものと錯覚している飼い主が多いのではないかと思わせる結果となっています。散歩に出かける前の排便のしつけの徹底が望まれるところです。

犬の鳴き声については、犬にとって「吠える」ことは、ごく自然なことです。吠えすぎは近隣からの苦情の原因となります。犬が鳴いたり、吠えたりするのは、何かのきっかけや興奮する原因があったり、何か要求があったり、縄張りを守ろうとしたり、相手を威嚇したり、不安があったりなどが原因となっていますので、これを防止するためにはこれらの原因を除去することとしつけが必要です。

いずれにしてもこれは飼い主の自覚によって改善されることですので、十分留意して迷惑をかけて苦情が出ないように努力しなければなりません。

繁殖制限(不妊、去勢手術)

メス犬を飼い、繁殖を望まないときは、次のような利点がありますので、不妊手術を受けるようにしましょう。

- ・年2回見られる発情期の出血や心理的变化が抑制でき、ストレスがなくなる。
- ・偽妊娠の兆候や、メス犬特有の病気、例えば乳腺腫瘍や子宮の病気が予防できる。

オス犬の去勢手術によるメリットは、

- ・メス犬に対する性的要求や興奮がコントロールされストレスがなくなる。
- ・攻撃的性格や粗暴な振舞いが抑制され、温和で飼いやすくなる。
- ・オス犬の高齢犬に発症が多い前立腺の病気や、肛門周囲の腫瘍の予防効果がある。

(5) 健康と安全の管理

犬種によりかかりやすい病気

犬はその大きさや犬種によりさまざまな特徴や体質の違いがあり、かかりやすい病気の傾向や、大型犬種の股関節形成不全のような遺伝的疾患もありますので十分な情報収集が必要です（図表10参照）。

主な病気（感染症）と予防

犬の感染症は、一度発症すると命にかかわる危険な病気が少なくありません。しかも感染後の治療は難しく、死亡率が高いのが現状です。中には病気が治っても後遺症に苦しむ場合もあります。こうした感染症を防ぐためには、ワクチン接種や予防薬の服用が効果的。感染症は予防が肝心です（図表11参照）。

ウイルスによる主な感染症には、狂犬病、ジステンパー、犬伝染性肝炎、犬パルボウイルス、犬パラインフルエンザなどがあります。この他、蚊の媒介で感染する寄生虫の病気のフィラリア症や細菌によるレプトスピラ症などがあります。

その他、気をつけたいのはコクシジウム原虫、回虫や鉤虫など腸内寄生虫の感染です。寄生虫の有無は検便でわかります。

人と動物の共通感染症

犬から人にうつる人と動物の共通感染症の中で代表的なものが狂犬病です。このほか、ダニやカビなどが原因となる皮膚疾患、犬の糞から感染するカンピロバクター、犬の回虫の「幼虫移行症」のほかQ熱などがあります。

	大型犬	小型犬
特徴	肘関節、股関節の形成不全。首の椎間板ヘルニアなど、骨や関節の成長に関係した病気が多い。	水頭症、膝蓋骨の脱臼が多い。頭骨の合わせ目(泉門)が開いている犬種は、頭部への衝撃を避けなければならない。老齢になったら、歯肉炎、心臓病に注意。
かかりやすい病気	<p>ゴールデンレトリバー 股関節形成不全、白内障や進行性網膜萎縮症などの眼疾患、心臓病が三大遺伝病。長毛種のため皮膚病も発生しやすい。</p> <p>秋田犬 皮膚病にかかりやすい。フォクト・小柳・原田様症候群(ブドウ膜髄膜炎)という免疫に関連のある目の遺伝病もある。</p> <p>イングリッシュ・セター 尾を傷つけやすく。出血すると長引く場合もある。老犬は白内障や難聴、鼓腸(腸内にガスが充満する)になることが多い。</p> <p>コリー 寒冷地原産のため、夏の強い紫外線に弱く、鼻すじや目の周囲に炎症が広がる日光性皮膚炎に要注意。コリーアイという目の先天性疾患が原因で、眼内出血や緑内障になることもある。失明する網膜の病気も警告されている。</p>	<p>シー・ズー 顔が扁平で目が大きいため、角膜炎など目の病気が多い。目の周りの皮膚を引っ張ると、目が飛び出してしまうこともある。喉頭・呼吸器疾患や、皮膚が脂っぽくベタベタした脂漏性の皮膚病になりやすい犬もいる。</p> <p>チワワ 呼吸器疾患、眼疾患のほか、先天性のものとして脳神経疾患(水頭症、後頭骨形成不全)になりやすい。</p> <p>マルチーズ 中には血小板減少性紫斑病の報告も多い。老犬になると心臓病をおこしやすい犬もいる。運動時に出る咳や疲れが見えたら要注意。外耳炎にも注意。</p> <p>ヨークシャー・テリア アレルギーや膿皮症などの皮膚病になるケースが多い。目の周りの被毛も結膜炎の原因に。歯周病にも注意。</p>

種類	接種・服用の時期
狂犬病予防接種 畜犬登録と予防接種は法律による飼い主の義務。	生後90日が過ぎたら第1回目を接種。以後年1回4月に追加接種。
5種(7種、8種)混合ワクチン 動物病院により、5種か7種かは異なる。犬パルボウイルス感染症には単体のワクチンも有る。 5種(犬ジステンパー、犬伝染性肝炎、犬アデノウイルス2型感染症、犬パラインフルエンザ、犬パルボウイルス感染症という5種類の病気を予防するワクチン) 7種(5種にレプトスピラの2種類の株を加えたもの) 8種(7種に犬コロナウイルス感染症を加えたもの)	生後50日前後に第1回目、その後3、4週間隔で1回以上接種。以後1年に1回。
フィラリア症予防薬 気候により、服用期間が異なる。	毎年5月～11月(地域や気候によって異なる)に月1回のペースで服用。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

犬の飼い主は「狂犬病予防法」に基づいて生後91日以上の犬には「登録」と「予防注射」が義務付けられています。日本では現在、狂犬病の流行が見られないために疎んじられている傾向がありますが、前述したとおり狂犬病は人にも感染し、致命的な経過をとる危険な感染症です。日本と交流の深い近隣諸国だけでなく、米国や欧州のいくつかの国でも発生が報告されているので油断はできません。犬に予防注射をして、いつ侵入しても流行拡大しないよう予防対策が重要です。

また、地方自治体によっては条例により一定以上の飼育頭数を規制しているところもありますので、確認する必要があります。

(7) その他特記事項

周囲の迷惑にならないよう、犬の放し飼いを行わないようにしましょう。

犬をけい留する場合は、けい留されている犬の行動範囲が道路または通路に接しないようにし、通行者に危害や迷惑を及ぼさないよう注意しましょう。

2 . 猫<食肉目ネコ科>

(1) 分類、品種

猫は食肉目ネコ科に属します。家猫は紀元前2～3千年の間、エジプトでリビアヤマネコを飼いならしたものとされています。現在、世界的に見ると40種ほどの品種が公認されています。わが国では日本猫のタイプだけでなく、ペルシャ系の長毛種や、シャム猫、アメリカン・ショートヘア一種の混血などが普通に見られます。

猫の品種は、被毛タイプ別に長毛種と短毛種に分類し、一つの品種で長毛、短毛種の二つのタイプがある場合を含め、日本でよく見られるものは次の通りです。

長毛種（ロングヘア）

ペルシャ、ヒマラヤン、ソマリ、バーマン、ラグドール、メイン・クーン、アメリカン・カール、ジャパニーズ・ボブテイル、スコティッシュ・フォールドなど

短毛種（ショートヘア）

アメリカン・ショートヘア、セルカーク・レックス、アメリカン・カール、シャム（サイミーズ）、アビシニアン、スフィンクス、ジャパニーズ・ボブテイル、日本猫など

(2) 形態、習性、生理

形態と大きさ

猫の種類が増加してきたのは50～100年位前からで、特徴のある毛色や体型などの個体が誕生すると、その遺伝子を固定するように人為的に繁殖を試みたからで、それぞれの体型などの特徴が受け継がれています。

例えば大きさで見るとノルウェージャン・フォレスト・キャットは体重3～9kg、シベリアン（サイベリアン）・フォレスト・キャットは4.5～9kg、メイン・クーンは4～10

kgといずれも大型種に属し、日本猫やシャム猫は2.5～5 kgですから比べるとかなり差があり、アメリカン・ショートヘアー（3.5～7 kg）、アビシニアン（4～7.5 kg）などはその中間タイプに属します。

寿命

ワクチンの開発と獣医学の進歩、キャットフードの普及によるバランスのよい栄養食などによって少しずつ寿命が延びる傾向があると考えられています。現在では14～15歳まで元気である猫は少なくありませんし、長寿の猫としては20年以上のものもいます。屋外飼養、屋内外出入りが自由な猫は感染症、交通事故などにより短命です。

生態と習性

1) 社会生活

猫類の生態はオスもメスも単独生活が基本ですが、それぞれが一定の広さの行動圏（ホームレンジ）と狩猟圏（ハンティングエリア）をもっています。

一軒の家の中で複数の猫が暮らす場合や餌場、休息場所を共有してコミュニティーを形成するなどして生活する場合があります。

社会生活をする上で動物相互間の情報交換や意志伝達が大切な役割を果たしています。意志伝達的手段として、音声、顔の表情、ボディランゲージなどがあります。

また、匂いによる情報伝達も極めて重要です。例えばマーキング行動の中に「尿によるマーキング」、「顔やわき腹などの擦り付け」、「前肢による引っかき行動」、「肛門囊からの分泌物」、「メスの発情期の性フェロモン」などがそれにあたります。

2) 猫の身づくろい（セルフグルーミング）

猫はたいへんきれい好きな動物で、猫特有のザラザラした舌で全身をなめまわしたりしています。これはセルフグルーミングという「毛づくろい行動」で、狩りをする猫にとっては臭いで獲物に気付かれないために必要な習性です。

また、これは自分で健康を保つための基本的な行動であり、皮脂腺を刺激して毛に防水性を保たせたり、暑いときの体温調節や脱毛の始末に役立っています。

3) 爪研ぎ（引っかき行動）

爪研ぎは、常に伸びてくる爪を適当な間隔で研ぎ、利用しやすい武器にしておく必要から行われる行動と従来まで考えられていました。しかし、その他にも行動圏の中で樹木や木材、柱など、室内では家具やソファなどが利用され、爪で傷をつける視覚的マーキングと足の裏から出る汗をつける匂いのマーキングの両者が同時に行われているのです。

また「爪研ぎ」をしている猫は、一種の快感を覚えているように見受けられますし、機嫌のよい時や遊びを誘う時、ちょっとはしゃいだ後などにも誘発されるのを見ると単なるマーキングの行動だけでなく、大切なボディランゲージでもあるようです。

4) 猫の行動範囲

猫は犬に比べ、はるかに行動半径が小さく、家猫の空間的広がりとしての範囲は、主

として自宅とその周辺で、飼い主の家と周辺の庭程度が「ホームレンジ」になっています。

メスや去勢されたオスの行動圏は小規模で狭く、逆に去勢されていないオスは広く、メスの約10倍程度といわれています。また、オス猫は近所にいるメス猫数頭を対象に巡回し、メス猫の分布状況によってはかなり広い地域をパトロールしていることとなります。

屋内飼いの場合、ホームレンジは、家族で暮らす部屋やベランダですが、本来猫は安心できる空間があれば狭くても暮らしていけます。

5) 夜行性

猫は本質的には夜行性の動物です。その証拠に闇夜でも視力が働き、人の眼が感じる最低の光量の6分の1の明るさでも物を見ることができるようになります。

しかし、現代の猫の行動を見ると飼い主の生活リズムに適應して行動するようになり、真の夜行性とはいえないようです。

6) 鳴き声

猫の鳴き声には、くつろいだ時に発するつぶやくようにのどを鳴らす声、自分に関心をひきつけたい時や食餌を求める時に発するはっきり音をだす声、攻撃、防御、交尾の際に発する金切り声や「ファー」という唸り声の3種類があります。

生理（繁殖行動）

1) 性成熟

オス： 生後18ヵ月の頃から性ホルモンの影響により、成獣のオスとして行動が大きく変化し、特徴的な鳴き声や尿を壁等に吹きつけるスプレー等の行動がみられるようになります。特に、オス猫の性行動に伴う三大問題といわれる、放浪癖、オス猫同士のけんか、スプレーが顕著となります。

メス： 生後7ヵ月から12ヵ月の間に最初の発情があります。発情兆候は落ち着きがなくなり、尾を上げて排尿回数が増加し、特有の鳴き声をだすなどの行動が見られます。また、一種の化学物質であるフェロモンを出してオスの性衝動を誘発します。

発情の頻度や間隔は飼われている環境や品種などによって個体差があります。発情が次々に来る猫もいますし、6ヵ月以上も発情しない猫もいます。一般的には1年に3回、約3ヵ月の間隔で、1月中旬～3月初旬、5～6月、8～9月に見られ、発情は約1週間程度続きます。

一般的な猫の発情期をモデル化すると図のようになります。

【メス猫の発情期】



通常、交尾をしない場合は、4～5週間おきに発情が起こります。
ただし、飼養環境やいろいろな条件で個体差がありますので、すべてがこのように発情するとは限りません。

2) 交尾排卵

猫は交尾の刺激によって排卵するタイプです。排卵が近づくと体を柱や家具、人間などに擦り付けたり、ごろごろ転がり、尾を上げてお尻を見せる行動などが見られます。この時期が交尾の適期なのです。

3) 妊娠

交尾排卵といっても、排卵は交尾が何回か行われることが必要といわれています。有効な交尾の刺激は、24時間後に排卵を起こして受精します。妊娠期間は63～65日、約2ヵ月です。

4) 出産と離乳

受胎してから約2ヵ月後、子猫が3頭～8頭(平均5頭)生まれます。離乳期は約1ヵ月齢(4～5週齢)です。

社会化期

猫にも猫特有の社会があり、そのルールを学ぶ、社会化期があることが知られており、社会化期に人や他の動物などに馴れさせておくことで落ち着きのある、飼いやし猫になります。逆に人や他の動物と接触していないなど、社会化が不十分な猫は、見知らぬ人や動物に会った時、攻撃的になったり、臆病で神経質な猫になったりします。

子猫同士が、お互いを認識してじゃれて遊び始めるのは3週齢頃からで、相手の顔や体に出し手を出したり、咬みついたりする動作から始まり、運動機能の発達に伴って、追い回したり、忍び寄って跳びかかったり、取っ組み合いを始めるようになります。

このような遊びの行動を通して、傷を負わせない程度の咬み方などを学ぶのです。

「社会化」が育まれるのが生後約3週齢～9週齢頃といわれており、この頃に母猫や生まれた兄弟姉妹たちと過ごした経験は、子猫の社会化のために大切なことです。

したがって、子猫を飼う場合は社会化期を過ぎてからが好ましい時期といえます。

もし、捨てられた子猫や人工哺乳で育て仲間と遊ぶ機会がなかった猫を飼う場合は、同年齢ぐらいの子猫がいる家庭に一時預けて猫同士で自由に遊べるチャンスを作ると「社会

化」がうまくいくといわれています。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

猫は家の中で自由気ままに生活し、屋外にも出て行く飼われ方をしてきました。しかし最近の都市部での住宅事情や集合住宅、高層化という環境では、屋内外の出入りを自由にするのは、猫にとってもかなり危険であるばかりか、猫の飼養密度の高い地域では、感染症にかかる確立も高いので、猫の幸せのためにも屋内飼いが推奨されるようになりました。

【屋内飼養の場合の配慮事項】

- ・不妊、去勢手術を行う。
- ・トイレのしつけを行う。
- ・立体的に行動できるようにする。
- ・屋内の危険物を除き、安全に努める。
- ・遊んであげる（ストレスを解消してあげる）。
- ・爪研ぎ器を用意する。

立体的に行動する猫

犬と違って猫は高い所に登るのが得意ですから、室内ではテレビの上や洋服箆笥の上、飾り棚の上などに登りたがると思います。室内空間で猫ができるだけ自由に生活できるように、禁止場所を少なくして、立体的に行動する空間を作ってあげることが大切です。

猫の排泄行動

猫は排泄場所を決めて、糞や尿を埋め隠します。子猫の時から猫用のトイレを用意しておけば特におぼたに教えなくても砂箱の中で排泄しますので、家の周囲や近隣の庭や花壇などを汚さないで済みます。

猫用のプラスチック製のトイレ容器も販売されていますし、台所用品の二重底構造の「水切りカゴ」も代用でき、猫用のトイレ砂を入れておけばよいのです。猫のトイレはいつも清潔にしておかないと、汚れた砂を嫌って他の場所で排泄してしまうことがありますので注意してください。

(4) 飼い方のポイントと注意点

繁殖制限（不妊、去勢手術）

不妊、去勢手術の効果としては、12頁の図表2に示したほかに、猫の場合、発情期に異様な声で夜通し鳴くことがなくなります。

メスの場合、約10日間ほどの発情の間、独特の鳴き声や行動を我慢すればおさまります。しかし妊娠しなかった場合は、猫によっては数週間後にまた発情します。メス猫が発情すると、かなり遠くからオス猫が集まってきて鳴き声を交わすので、夜間など迷惑に感じる人も少なくありません。また、トイレ以外の場所で放尿(マーキング)するものもいます。

オスの場合、屋内外出入り自由に飼われている猫はメスのいる家へ侵入して尿マーキングをしたり、また、発情期のメスを求めて鳴く声や、メスをめぐる闘争、夜間の鳴き声は近所の迷惑になるでしょう。

性成熟したオスは外出したが、外出させないでいると家中にスプレーをして回り、その独特の匂いはとても耐えられるものではありません。

猫の食事と栄養

1) 栄養

猫は高タンパクで高脂肪の食べ物を好みますが、肉や魚だけを与えておけばよいというものではありません。さらにビタミン類やミネラル分も必要です。ビタミンCは体内で合成できますが、ビタミンAは外から取り入れなくてはなりません。

ご飯などの炭水化物は、猫は特に必要としませんが、食べれば消化吸収し、エネルギーとして利用します。

猫は食塩の要求量が少ない(犬の半分)ので、塩分の多い食べ物はよくありません。甘い菓子類も食べさせてはいけません。調味料や香辛料も同じで、食事に味付けは不要です。

動物が生きるのに欠かせない必須アミノ酸に「タウリン」がありますが、人間や他の動物では体内で合成できるのに、猫ではそれができません。タウリンが欠乏すると視力障害や発育不全、心臓病や血液の病気などを引き起こします。タウリンは肉・魚介類に多く含まれています。

2) 猫の食性

食動物のうちで、猫類は最も狩りに適応した動物で、食性は肉食性で植物を原則的には食べません。しかしながら、家猫は長い間人間に飼われてきたので、多かれ少なかれ雑食性の傾向があります。猫は好物の幅が狭くて食べ慣れた味に固執する傾向があります。

猫の胃は体の大きさに比べて大変大きく、食べ溜めができます。しかし、食べ物がいつも食器の中にあり、ねだればすぐに新しい食べ物が出てくるという現代の猫は、昼も夜も無関係に少しずつ何回も食べるという食習慣に変わってきています。

また、猫は食べ物の鮮度に大変敏感ですからキャットフードなども常に新しいものを好みます。

猫には、偏食がもとで起こる病気が少なくありません。食べ物の好き嫌いは子猫のうちが決まりますから、一つの食べ物に偏ることなく、この時期にできるだけいろいろな食べ物を与えて、何でも食べられる猫にしつけることが大切です。

3) キャットフードの与え方

キャットフードにはドライタイプとウェットタイプがあり、これらを上手に利用するとよいでしょう。病気の猫に対しては、症状に応じて適切な療法食が用意されています。

ドライタイプは保存性も栄養のバランスもよく経済的です。しかし水分が約8%しか含まれていませんので、新鮮な水をいつでも自由に飲めるようにしておくことが大切です。ドライタイプだけの場合、飲む水の量が少ないと、尿の濃度が上がって尿結石ができやすい素地をつくったり、腎臓に負担をかけることが多いので注意が必要です。

ウェットタイプには水分が70%も含まれ、缶詰やレトルト製品があります。猫が缶詰を喜んで食べるのは鮮度がよく、猫の嗜好に合うように作られているからです。なお、ウェットタイプだけを食べていると歯垢や歯石がつきやすいので、ドライフード等も併せて利用するとよいでしょう。

1日に与えるキャットフードの量は、年齢、体重、活動的かどうか、授乳中などで異なりますから獣医師に相談するとよいでしょう。

(5) 健康と安全の管理

主な病気と予防

猫の生命にかかわる恐ろしいウイルス性の感染症が、いくつかあります。

1) ワクチンで予防できるウイルス感染症

- ・猫汎白血球減少症（猫伝染性腸炎）

猫のパルボウイルスの感染でおこります。

- ・猫上気道感染症（猫ウイルス性鼻気管炎 / 猫カリシウイルス感染症）

前者はヘルペスウイルス、後者はカリシウイルスでおこります。

- ・猫白血病ウイルス感染症

2) ワクチンの接種

生まれた子猫が初めて飲む母乳を「初乳」といい、様々な病気に対する抗体が含まれ、生後2ヵ月ぐらいまでは病気から守られています。この期間を過ぎると病気に対する抵抗が低下しますから、ワクチンの接種が必要になります。

パルボウイルスは人間の靴や衣服に着いて家の中に侵入しますし、風邪が治ってもヘルペスウイルスは3週間ぐらい目や鼻の分泌物の中にいます。また、カリシウイルスは扁桃腺の中に残っていて長い時は何年も居続けることがあります。猫白血病ウイルスは唾液の中に出るので、同居猫のなめ合いやけんかの傷から感染することもあります。病気の猫は他の猫と接触させず、抵抗力のない子猫は外に出さないほうがよいでしょう。

ワクチン接種は生後7～8週ごろに1回目、その3週間後に2回目、その後は毎年1回の追加接種をします。子猫を手に入れた時はワクチン接種の有無を聞くことが大切ですが、わからないときは獣医師に診せてください。

3) ワクチンのないウイルス感染症

- ・猫伝染性腹膜炎
- ・猫免疫不全ウイルス感染症

以上2つのウイルス感染症は、単独ではあまり重い症状にはなりません、重複して感染すると致命的になることがあります。まだワクチンは開発されていませんから、最良の予防手段は他の猫と接触させないことです。

4) 感染症以外の重い病気

- ・泌尿器症候群

猫には、腎臓、膀胱、尿道などの泌尿器系の病気が比較的多く発生します。

- ・心臓病と胸部疾患

心筋症や膿胸（胸膜炎）などは発見が遅れがちで、重大な結果を招きます。突然現れる後躯麻痺（腰ぬけ）も、心筋症に関連が深いことが多いので要注意です。

- ・皮下膿瘍

オス猫は、けんかの外傷などから化膿菌が入り、皮下に大量の膿（うみ）がたまることがあります。

- ・猫のフィラリア

フィラリア（犬心臓糸状虫）は蚊が媒介するもので、最近、猫にも寄生して肺に障害を起こすことがわかってきました。フィラリア症は1ヵ月に1回予防薬を飲ませるだけで予防できます。

5) 猫のノミ

内暖房のおかげで、今は冬でも猫にノミの寄生が見られます。ノミはアレルギー性の皮膚炎の原因になるだけでなく、人間も刺されて足首などにかゆい発疹ができることがありますし、猫の腸内寄生虫の瓜実（うりざね）条虫の中間宿主ともなりますから、数が増えないうちに対策を立てるようにしましょう。

ノミのほとんどは猫の体ではなく、成虫も卵も猫の体から落ちてカーペットなど床の暗いところに住みついています。幼虫からサナギになると、猫が近づいた振動で殻が開き、成虫になって猫に取り付きます。ですから、ノミ退治には、床をいつも清潔にしておくことが大切です。

ノミの殺虫、駆除剤は、猫の体に薬液をスプレーするタイプ、薬液を滴下するタイプ、薬成分を封じ込めた首輪タイプなどがあります。また、内服薬や注射薬などでノミの幼虫の成長を阻害して繁殖を防ぐ薬剤もあります。環境、季節を考慮しながら、これらの薬剤を組み合わせ、効果的で抜本的なノミの駆除対策をとりましょう。

人と動物の共通感染症

猫から人にうつる感染症には、猫ひっかき病、トキソプラズマ症、皮膚糸状菌症、疥癬症、狂犬病、Q熱などがあります。

(6) その他特記事項

猫の健康と安全、近隣迷惑の防止のために、屋内飼養と不妊、去勢手術の実施が望まれています。

3. ウサギ<ウサギ目ウサギ科>

(1) 分類、品種

ウサギ目はウサギ科とナキウサギ科の2科があるのみで、ウサギ科はアナウサギと、それとはまったく別種のノウサギからなります。愛玩動物として飼われているものはアナウサギの改良品種です。

品種としては、小型のネザーランド・ドアーフから、大型のフレミッシュ・ジャイアントや毛の長いアンゴラ、耳の垂れ下がったロップイヤー、たてがみのように首の周りの毛が立っているライオンなどさまざまで、現在、50以上の品種があるといわれています。

(2) 形態、習性、生理

大きさは体長30～60cm位、体重1～6.5kg位と品種によりさまざまです。耳は血管が張りめぐらされた敏感なところであり、汗腺が発達していないため、ここで体温調節の役目を果たしています。高温多湿に弱い動物の1種といえます。反面、水はよく飲み、水分が不足すると自分の尿を飲むようになりますし、子育てのときは子を食べてしまいます。

本来、夜行性であり、食性は草食性。木の皮や若木、草やその根、実、畑の作物などを食べています。軟便と固くて丸い便の2種類の便をし、軟便はもう一度肛門から直接食べてビタミンB₁₂などの未消化栄養素を吸収するという二重消化の特徴をもっています。

オスには順位制があります。寿命は5年～15年で、性成熟は品種により違いがあり4～10ヵ月(大型種ほど遅い)です。交尾排卵のため1年中繁殖可能ですが、だいたい1年に3～4回(1回に4～7羽)繁殖するようです。妊娠期間は30～35日で離乳期は45日前後です。ふだんはおとなしいですが、不妊手術をしていない場合、発情すると特にオスは気が荒くなり、咬まれると思わぬケガをすることがあります。また、鋭い門歯に指を当てただけでもケガをすることがありますので、幼児や児童が扱う場合には注意が必要です。体臭はほとんどありませんが、糞尿の量が多いので、処理を怠ると臭気がひどくなります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

室内のケージ飼いが一般的ですが、屋外施設を利用する飼育方法もあります。

室内のケージ飼育をする場合

ウサギ専用のものや小鳥用大型ケージのほか、犬用ケージ(天井がなくともよい)を利用します。床材としては、木製のすのこを敷き、すのこの下にペットシートか新聞紙を厚めに敷いておくと毎日の掃除に便利です。床の隅には、主食用とその他の用のための食器2個(プラスチック製だと齧ったときに危険なので陶器製がよい。齧っても害はない木製のマスも適切です)、ウサギ用トイレ(中に固まらないタイプの猫砂を敷いておきます)、寝床(中にワラを敷きます)を設置します。ケージの側面には、食用の乾牧草入れ(ケージの外に掛ける専用のもの)と、サイホン式の給水ピンを取り付けます。運動不足からストレスとならないよう、目の届く時間にはできるだけ室内に出してふれあいを図ったり遊ばせたりすることが大切です。室内の色々な危険や事故を避けるためにはサークルの利用が有効となります。

屋外の施設飼育をする場合

木製の小屋が一般的です。地面を金網の柵で囲って自然に近い状態で飼育することもできます。この場合は、地中に穴を掘って柵の外に逃げられないように、地中にブロックか、トタン板(雨水が溜まらないよう水抜き穴を作ること)などでプール状に仕切りを埋め込むなどの工夫が必要です。

飼養環境

高温と、特に湿気に弱い動物であることを考慮する必要があります。特に梅雨期には湿気を防ぎ、夏季には直射日光が避けられ、涼しく、湿気のこもらない通風のよい環境をつくるのが大切です。

寒さにはかなりの抵抗力がありますが、本来地中生活者であるため、冬季の昼夜の急激な温度変化にはさらさないように気を付け、隙間風を防ぐのが大切です。採光は、昼間は窓からの自然光が得られ、夜は暗くできるような環境にします。日光浴は、タオルなどで日陰の避難場所を作って春、秋、冬の穏やかな陽射しに時々当てる程度にし、夏季の強い日差しの日光浴は考えないほうが無難です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

繁殖制限

繁殖を希望しない場合は1頭飼いが原則です。オスのほうが人なつっこい傾向がありますが、性成熟を迎える前の生後4～6ヵ月頃(品種により違いがあります)に去勢手術をすればスプレー行動などがなくなることが多く、発情時の気の荒さもなくなり非常に飼いやすくなります。1つのケージでのオスどうしの複数飼いはけんかをするので避けましょう。メスどうしの複数飼いは可能ですが、その場合にも性成熟を迎える前に不妊手術をしたほうが発情のストレスもなくなりウサギのためにはよいでしょう。

食 事

主食は専用のペレット(固形飼料)と乾牧草にし、おやつ程度に小松菜などの根菜類・菜っ葉類、りんごなどの果物、オオバコなどの野草を与えます。また、ミネラル補給のための塩土と、歯の伸びすぎ防止のための「かじり木」は常置しておきます。湿気に弱いといっても水は大変よく飲みますので、常に新鮮な水を用意しましょう。なお、下痢をしやすいので水分の多い野菜や果物の多給は控えるのが大切です。ペレットは1日に朝夕の2回、30分程度で食べきってしまう程度の量を与えます。乾牧草はいつでも食べられるように新鮮なものをに入れておきます。嗜好性にかたよりがみられることが多いので、若いときからペレットと乾牧草に十分に馴らしておくことが重要です。

食物の注意点

野菜や果物は、農薬やワックスなどの危険があるのでよく洗い、下痢を防ぐために水気が乾いてから与えるようにします。また、野草を与える場合は、除草剤がかかっていると致命的ですので要注意です。与えてはいけないものに、肉類や、タマネギ、ニラ、ニンニクなどの刺激性のある野菜類、チョコレート、クッキー、ケーキなどの甘いものや人間の食べ物、有毒な園芸植物、観葉植物、野草があります。

なお、干牧草はダニやカビの発生を防止するため、買って帰ったらいったん天日干ししてから湿気ないように密封して保管するのが適切です。これは、寝床や床材として使用する場合も同様で、ワラにも同じことがいえます(以下、小型哺乳類はこの項については同様)。

収容物等の手入れ

尿の量が大変多いので、トイレや寝床の汚れた部分、すのこの下の新聞紙はこまめに取り替え、食事の管理ごとに食器や給水ビンもよく洗い、適宜すのこもよく洗って乾燥させ、週に1回か高温多湿の時期はそれ以上にケージ全体を洗剤で洗うか熱湯消毒して天日干しをします。

その他の手入れ、しつけ

幼齢時からブラッシングに馴らし、時々心掛けましょう。特に毛が抜け替わる春から夏にかけては念入りをする必要があります。湿気に弱いのでシャンプーは禁物です。爪が伸びすぎると歩行困難を起こしますので、伸びた場合には爪切りが必要です。

トイレのしつけは犬の場合と同じようにできますので、ぜひ覚えさせましょう。覚えやすいように、最初にトイレの中に自分の排泄物の臭いがついたものを少し入れておくのがコツです。

運動

ケージの中だけでは運動量が足りません。目の届くときに部屋の中で遊ばせましょう。その際、室内にはケガや事故の原因となるものが多いことに留意し、予め防止策を講じておくことが必要であり、これは他の動物の場合も同じです(電気コードや観葉植物、家具類、たばこなどかじられたり食べられたりしないように、また、家具類の上の置物が落下しないようにします)。床が畳だとかじられますし、板だと滑りやすいので、床には爪が引っ掛からないじゅうたんを敷きます。合成繊維のカーペットは齧って飲み込んだときに固い毛玉になって胃にたまりやすくなり、ループ状のカーペットは爪を引っかけて骨折の原因になるので避けましょう。遊ぶときに、敏感な耳を掴んで持ち上げるのは苦痛となるので禁物です。また、後肢を支えて抱くのは、時にジャンプして落下したときに骨折しやすいので、これも禁物で、抱くときは必ずお尻を支えにしましょう。

逸走防止等

ケージに入れている間は、逸走防止のためケージの扉はナスカンなどでしっかりと留めて置きましょう。逸走防止のため、室内に放すときはもちろん、日常の掃除、ケア一時にも窓やドアはきちんと閉めてあるかどうか確認することが大切です。

危害防止、迷惑防止

門歯に指を引っかけてケガをする場合も多いので、特に幼児がケージの間から指を入れないよう、また室内で一緒に遊んでいる際にも不用意に口許に指を近づけないよう注意することが必要です。

屋外施設で飼っている場合には、糞尿の臭いや衛生害虫の発生、コクシジウム感染防止のため、こまめに掃除を心掛け、周囲への迷惑防止を図らなければなりません。

(5) 健康と安全の管理

健康と安全(12.ハリネズミの項に共通)

健康と安全については、体が小さいだけに抵抗力がなく、病気が発症したら致命的とな

るものが多いため、日頃の注意深い観察と予防（適正な飼養管理に尽きます）が特に大切となることと、意外に些細なことが大きな影響を与えるということ、たとえば、日照（点灯）時間の不規則や不適切によるストレス症状や、食物連鎖の中で下位に位置するものであるだけに非常に臆病で環境に対して敏感であり、騒音などによるストレスの健康への影響が大きいことなどを理解してもらうことが重要です。

また、病気発症以外の日常的な事柄で起きる事故や死亡例が多い動物たちであることにも十分注意することが大切です。たとえば、子供が走り回ってドアを大きな音を立てて閉めたり、個体の移し替えやケア時に逃げようとした個体をあわてて捕まえたりした際などに簡単にショック死や気絶をさせることもありますし、窓からの陽差しや石油ストーブなどでの不注意による熱射病や一酸化炭素中毒、暖房停止や気候による昼夜の急激な温度変化による死亡、衣類や布団などに潜り込んでいることに気付かなかったり、あるいは単純な行為での踏みつけや押さえつけによるケガや圧死、滑りやすいテーブル上で遊ばせていたり抱いていた際の落下事故などです。

ウサギの主な病気と予防等

1) 下痢

尻に糞がこびりついていたりすると下痢をしています。また、ウサギの糞はやや硬めであまり臭いませんが、体調が悪くなると臭ってきますし、軟便になります。下痢は細菌感染によるものが多く、腐った食物を与えないことや給水器、食器、環境の清潔を保つことが予防となります。

2) コクシジウム

血便のときは腸内へのコクシジウムという原虫の寄生によるもので、この寄生はウサギには多いといわれ、感染しても元気なときは症状は出ませんが、ストレスなどが原因で現れてきて、発症すると死亡率も高いものです。

3) 毛球症

糞がいつもより硬くなるとこの病気が疑われます。ウサギは毛づくろいをよくしますので毛を飲み込みやすく、排泄できずに消化管の中にたまと起こります。ひどくなると便秘になり食欲不振、体重減少となります。ブラッシングを怠らず、またおやつが多給などで偏食させず、排泄しやすいように乾牧草を欠かさず与えることが予防となります。

4) スナッフ

咳や鼻水を出したり、ゼーゼーと苦しそうに息をしたり、風邪症状を示します。細菌が原因の伝染性の疾病で、多頭飼養の場合、健康な個体はすぐに他に隔離し、飼養機材の消毒が必要です。死亡率が高く治療の難しい病気です。予防には清潔さが大切で、また、新しく個体を導入する場合には、鼻水を出していないかどうかチェックするとともに、検疫期間を設けることが大切です。

5) その他の病気

ノミ、ダニ、シラミなどの寄生虫が付きやすいので注意します。特に耳に付く耳疥癬（耳ダニ症）はウサギに多い伝染性の病気で、初期のうちは耳を垂れ、頭を振り、あるいは足で掻くなどのことから発見できます。

皮膚真菌症もよく見られる皮膚病です。ケージ等や周囲の環境を清潔に保つこと、普段からブラッシングをして被毛をよく手入れしておくことが予防となります。

門歯の伸びすぎは、食物を食べられなくなりますので、かじり木などの硬い食べ物で予防します。

人と動物の共通感染症

パスツレラ症、野兔病、サルモネラ症、皮膚真菌症、ウサギツメダニ症などがあります。

疾病には様々なものがあり、素人判断は禁物です。早期発見、早期治療が大型動物に増して重要なことはいまでもありませんので、日頃から小型動物診療が可能な動物病院を見つけておくことと、ある程度定期的な検診を受けることが病気の早期発見につながるということです。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

「家畜伝染病予防法」で指定検疫動物になっており、輸出入の際には1日の検疫が必要となっているほか、輸入には輸出国政府機関発行の健康証明書が必要です。

4 . ハムスター〈げっ歯目ネズミ科〉

(1) 分類、品種

ハムスターはげっ歯目ネズミ科に属し、愛玩用として飼われている種は、ゴールデンハムスター属のゴールデンハムスターと、ヒメキヌゲネズミ属のジャンガリアンハムスター、キャンベルハムスター、ロボロフスキーハムスターの3種（この3種は小さいという意味のドワーフハムスターと総称され、以下、ドワーフと略します）、キヌゲネズミ属のチャイニーズハムスターなどがあります。

(2) 形態、習性、生理

愛玩用の中で最小のロボロフスキーハムスターの体長は約7cm前後、体重15～40g、ゴールデンハムスターは体長12～20cm、体重80～150gとさまざまです。

穴掘りに適した鉤爪のある指をもつ前肢は非常に器用に動かせ、物を掴んだり毛づくろいができます。

頬袋をもち、大量のエサを巣まで運べます。嗅覚と聴覚は発達しており、背中左右に臭腺をもっていて（ドワーフには口の両端にもあります）臭いで個体識別ができます。上下2本ずつの門歯は一生伸びつづけますが、これは以下のげっ歯類に共通します。

野生では寒暖差の激しい砂漠や乾燥草原地帯に地中深く巣穴を掘って生活しています。夏の日中は暑さを避けて地中で眠り、夕方から食べ物を探し、冬は冬眠しながらも時々貯蔵し

た食物を食べるといふ夜行性、疑似冬眠性の動物です。ドワーフ、チャイニーズ以外は単独生活者で、オスとメスの出会いは交尾のときだけです。

食性は雑食性で、草の葉や茎や根、種子、果実のほか虫、小型の爬虫類など動物質のものも食べています。寿命はふつう2～3年です。離乳期は約3週間で、約5週間で大人の大きさになって性成熟します(メスの性周期は4日、妊娠期間は16日前後、一度に4～13頭を産みます)。

管理が悪くなければ、臭いはほとんど出ません(トイレのしつけは可能)。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

水槽飼いか専用の金属製のケージ飼いが一般的です。

水槽飼いは温度や騒音(非常に臆病)の管理には向いています。半分くらい土を入れるとトンネルを掘って自然の状態に近い生活を観察できます。蒸れやすいので天井は密閉しないで金網でフタをします。

ケージ飼いは世話や掃除に便利ですが、温度や騒音の管理に気を使う必要があります。高さのあるものはよじ登って落ちてケガをしやすいので、床面積の広いものを選びましょう。1日に8kmくらいは動き回るといわれているほど運動量が多いので、できるだけ広さのあるケージ等と回し車やトンネルなどの運動具や遊具が必要です。床には、干し草、ワラ、チップ(杉や松など針葉樹が素材のものはアレルギーを起こすことがあります)などいずれかを適当に混ぜてハムスターが潜れるくらいに厚めに敷きます。床の隅には主食用と副食用の食器2個、ハムスター用トイレ、木製の巣箱(中に床材と同じものを入れる)を置き、側面には給水ビンを設置します。

飼養環境としては、寒暖差の激しさ、低温(15以下になると動きが鈍くなります)と高温、多湿、特に突然の大きな物音、騒音を嫌うということを踏まえることが必要です。採光は、昼間は窓からの自然光が感じられ、夜は暗くできるようにします。水槽飼いの場合は蒸れないよう通風に十分気をつける必要があります。

(4) 飼い方のポイントと注意点

ドワーフ及びチャイニーズ以外の単独性のハムスターはつがいにせず1頭ずつ別々の収容物で飼うのが原則です。縄張り意識が強く、オス・メスどうしてもけんかしてしまうからです。もし繁殖を希望するならオス・メスの見合い期間を設けて相性を見るなどの措置が必要ですが、生まれた子供の数だけ収容物が必要となりますので、覚悟が必要です。繁殖を希望しないなら、1年中繁殖が可能で性周期も短いためすぐに増えてしまいますので、オス・メスを一緒に飼うのは禁物です。

晩秋頃から冬季にかけてはヒマワリの種やクルミを多めに与えて体力をつけ、保温に気をつけて、飼養下では冬眠させないで飼ったほうが無難です。

主食は専用のペレットにし、副食として色々なものを少しずつ与えましょう。1日に1回、夕方の活発に動き回る頃にエサを与え、傷みやすい副食の食べ残しはしばらくして片づけてください。ハムスターは下痢を起こしやすく、下痢をしたら致命的になりやすいからです。ま

た、傷んだエサは頬袋の炎症の原因にもなります。

副食としては、根菜類や野菜、ハト用配合飼料などの穀類、アルファルファなどの乾牧草があります。大好物のヒマワリの種やクルミ、ピーナッツなどの種子類は脂肪分が多いのでおやつ程度に、ふれあいを図るために与え、肥り過ぎに注意します。

また、一日おきくらいにペット用煮干しやゆで卵の白身などの動物性食品やリンゴなどの果物を与えます。なお、ミネラル補給のための塩土と、歯の伸びすぎを防ぐため「かじり木」は常時置いておきます（これは、以下のげっ歯類に共通します）。毎日、巣の中に溜め込んだ食物を点検し、生ものや腐りそうな物は取り除きます（巣の中に食物を貯める習性のあるものは、以下同様にします）。

ケージ等や個体の手入れ、しつけはウサギに準じます。なお、トイレ砂は全部を取り替えますが、臭いの付いたものを少しだけ残しておきます。同様に、週に1回は床材と巣材を全部取り替えますが、臭腺で縄張りに臭い付けしていますので、汚れていない古い床材を少し混ぜます。夕方などに一緒に遊んでやれば運動にもなりますし、よく馴れます。おやつを使って人の手によく馴らしましょう。また、自由にしておくならともかく、長時間手でいじることはハムスターにとっては大きなストレスになり健康を害することになるということに留意しなければなりません。

逸走防止はウサギに準じます。ハムスターの背後又は上方から急に掴もうと手を出したり、眠っている時や仰向けになって「キーキー」と声を出している時（これは怒っているか、怯えている時のしぐさ）やよくなついていないものにうっかり手を出すと咬まれることがあり、意外に深い傷を受けることがありますので、幼児などが不用意にケージの中に指を入れないよう注意する必要があります。

ハムスターによる咬傷事故に注意

ハムスターに咬まれたことにより、アナフィラキシーショックをおこす飼い主がでています。ハムスターの唾液にアレルギー反応をおこすことにより発生したと考えられています。ハムスターに過度に接触しないこと（ ページ参照）、咬まれることのないように注意してください。

(5) 健康と安全の管理

体の調子が悪くなると耳がレタスのようにクシャクシャした感じになるのがハムスターの特徴です。健康時の糞はだいたい茶褐色でコロコロしています。

主な病気と予防

1) 下痢

尻が汚れていたり尾が濡れて棒状になったりしていると下痢をしています。糞の状態からもわかります。下痢の原因はさまざまです。食物や水、飼養環境の不清潔さ、過度の接触や騒音などによるストレスが最大の敵です。

2) カゼ

くしゃみをしたり鼻水や目ヤニを出したり、ゼーゼーと苦しそうに息をしたりします。

予防は、昼夜の急激な気温変化にさらさないこと、普段から十分な運動と栄養で体力をつけておくこと、ストレスを与えないこと、などです。

3) 皮膚病

患部には病状の進み具合などにより毛並みの荒れ、脱毛、じくじくした液の滲み、かさぶたなどが見られますのでわかります。飼養環境を清潔に保つことが予防となります。

4) 腫瘍

さわると体にしこりがあるのに気付くことがあります。早期のうちには手術で治療可能です。早期発見できるよう接触観察が大切です。

人と動物の共通感染症

げっ歯類の人と動物の共通感染症として考えられるのは、腎症候性出血熱、レプトスピラ症、真菌症（皮膚真菌症、糸状菌症）、エルシニア症、サルモネラ症、リンパ球性脈絡髄膜炎、野兔病、ペスト、リーシュマニア症、ネズミチフスなどです。

5. マウス〈げっ歯目ネズミ科〉

(1) 分類、品種

マウスはげっ歯目ネズミ科のハツカネズミを研究用に改良したものです。一般的な品種は全身が白色で目の赤いアルビノですが、茶や黒い毛が現れたものや全身が黒、グレイ、茶などさまざまな色変わりや、研究用に改良された無毛・無菌のもの（ヌードマウス）もあります。また、ひと回り小型のパンダマウス（体長約5cm）といわれる品種もあります。

(2) 形態、習性、生理

体長約7cm、尾長約8cm、体重はオスが40g前後、メスが30g前後。毛のない細長い尾は体温調節の役目をしているといわれ、また尾を器用に巻き付けて使い、樹木や綱などの細いものでも登り降りや渡ったりできます。前肢（指は4本）は器用で物を掴んだり毛づくろいしたりします。後肢（指は5本）で身体を支えて立つことができますし、かなりジャンプ力があります。頬袋はなく、食物を巣内に貯めたりする習性や冬眠習性はありません。活動は日が暮れてから開始し日が昇る前までには終える夜行性です。マウスは学習能力に優れ、1頭で飼えば人によく馴れます。寿命は2～3年ですが、6年の記録もあります。生後4～6週間頃に体重が急に増え、繁殖が可能となります。繁殖適期は生後2ヵ月くらいからで、1回で6～13頭を出産します。妊娠期間は平均20日、離乳期は約3週間です。

おとなしく人馴れしやすい性質がありますが、不用意に手を出すと噛み付くこともあります。体臭はハムスターよりも少し強く、排泄物の量が多いので掃除をこまめにしなければ臭いがかなりきつくなります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

専用のケージで飼うか、水槽飼いが一般的です。高さがある程度あるものが適当で、ハシゴや枝付きの木などを立てかけておいたり回し車を設置しておくことで運動に使います。また、

市販の迷路や穴のあいた玩具などで遊ばせることも有効です。他はハムスターに準じます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

複数飼いは可能ですが、オスは強いものが弱いものをいじめることがあり、逃げ場所がないとケガを負わせたり共食いしたりしますし、オス・メス混合飼養だとすぐに繁殖してしまいますので、考慮が必要です。ふれあいを図るためには1頭飼いが適当で、よく馴れます。

主食はマウス・ラット用ペレットかハムスター用ペレットにします。副食やその他はハムスターと同じで構いませんが、ドッグフードなどを加えて動物性タンパク質を多めにします(キャットフードは肥満になりやすく不向きです)。食物や水分が不足すると、複数飼いの場合は共食いが起こりますので注意します。ペレットなど腐りにくい食物の食べ残しは次の食事の時までそのままにしておいて構いません。排尿はたいてい隅のほうにしますが、あちこちに臭いつけをすることもあります。尿量が多くてトイレにはしないので、掃除は毎日こまめにしましょう。毎日1回は一緒に遊ぶとよくなつきます。マウスはしっぽを持っても嫌がらず大丈夫です。

(5) 健康と安全の管理

飢餓状態になるとすぐに餓死しますし、複数飼いの場合は共食いが起きるので、うっかりしてエサを切らさないように注意する必要があります。

主な病気と予防

外部寄生虫病(疥癬など)や、癌、腫瘍がよく見られます。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。中でも、ネズミ科に属するものには特にレプトスピラ症、鼠咬症のほか、ネズミチフスに関心をはらう必要があります。また、腎症候性出血熱は国内の動物実験施設での発生例がありますので特に気を付ける必要があります。

6. スナネズミ(ジャービル) <げっ歯目ネズミ科>

(1) 分類、品種

げっ歯目ネズミ科に属し、人間には100年ほど前から実験用に飼養されてきました。原種は灰褐色で腹は白色ですが、白い身体に赤目のアルビノや黄色がかかった褐色、灰色、黒、それらのツートンカラーなどの色変わりなどがあります。

(2) 形態、習性、生理

体長13cm前後、尾長10cm前後、体重は60g前後。尾はマウスと違って毛で覆われています。前肢は小さくて器用で、物を掴んだり毛づくろいし、後肢は太くて強く、30cm以上も跳び跳ねることができます。へその下に皮脂腺があり、その周りは分泌液で濡れています。

野生下では、水分の消失をできるだけ抑えるために汗をかかず、腎臓で濾過した水分を再利用して濃い尿をします。地中にトンネルを掘ってオス1~3頭に対しメス2~7頭と子供たちで群居生活をし、子育てにはオスも加わります。共同体意識は強く、群れは縄張りをも

っていてよそ者は寄せつけません。基本的に夜行性ですが、気温が適当であれば昼間でも地上で活動します。

食性は、雑食に近い草食性で、草の種子、葉、茎、根、果実を主として虫なども食べます。冬毛と夏毛があり、春先と秋口に換毛します。冬眠習性はありません。寿命は4～7年。生後2～3ヵ月で性成熟し、繁殖適期は生後3ヵ月くらいからです。妊娠期間は25日前後で、1回で平均5頭を出産します。離乳期は生後約1ヵ月です。メスの性周期は4～6日ですが不規則です。年中繁殖は可能ですが、ふつう春から秋にかけて3～4回出産します。

おとなしく、噛み付くことはほとんどありません。尿の臭いはきつくなく、量も少なく、ほとんど臭いを出しません。「ピーピー」という小鳥のような小さな声を出します。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

ケージや水槽等のセットはハムスターに準じますが、スナネズミの特徴として床材を飛び散らかすのが常ですし、跳びはねることもありますので、なるべく大きめのものを用意します。ケージ飼いの場合は、テーブルクロス用の厚めのビニールでケージの高さの3分の1くらいを巻き付けておけば周囲への散らかしを防げます。水槽はその点が楽であり、また、小さな隙間に尻尾を引っ掛けやすい傾向があるので、水槽のほうが適しているといわれます。トイレは、しつけが難しいので不要です。なお、自然に爪が削れるように岩を入れておくと爪の伸びが防げます。

飼養環境としては、非常に臆病で気絶しやすいので、大きな物音がすることのない静かな環境を考えることが大切です。他はハムスターに準じます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

スナネズミは群居性で、なれた個体同士ではけんかもないので一つのケージや水槽等での複数飼いは可能ですが、オス・メス混合だとすぐに繁殖してしまいますのでよく考慮する必要があります。元々人間にはなつきにくい面がありますが、ふれあいを図るためには1頭飼いが適当です。臆病なので、驚かさないうちで注意しながら食べ物を使って根気よく馴らすことがコツです。

主食はハムスター用ペレットでよく、食事内容はハムスターに準じます。ただし、動物性食品の割合は少なめにします。毎日、巣の中に貯めこんだ生ものや腐りそうな物は取り除き、汚れた巣材や床材も新しいものに取り替えます。週に1回は床材と巣材は全部新しくしましょう。少なくとも月に1回以上は飼養機材全部を洗剤で洗うか熱湯消毒をし、天日干しして清潔な環境を保ちましょう。ジャンプ力があるのでふれあいを図るときには段ボールなどで囲った中で遊ぶのが安全です。また、水槽のフタを開けた途端にジャンプして飛び出す場合がありますので注意しましょう。ケアー用ケージに移すときなど、スナネズミは尻尾をつまんで持ち上げて構いませんが、尻尾の先を持つと皮がむけることがあるので必ず付け根を持つように注意し、片方の手の平に乗せます。もし、部屋の隅や物陰に逃げた場合、あわてて捕まえようとするとうちで気絶させたりケガをさせたりしかねないので、食べ物を入れた缶を近くにおいておき、おびき出して捕まえるようにします。

(5) 健康と安全の管理

ストレスが原因でケージの金網を齧り、鼻や口を傷つけてしまうことがあります。広いケージに換えるか、癖になっているようなら水槽飼いにしましょう。驚かさないようにすることが大切です。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。特にアレチネズミ類はペストやリーシュマニア症を媒介することに注意が必要です。

7. モルモット<げっ歯目テンジクネズミ科>

(1) 分類、品種

モルモットは南アメリカ原産で、げっ歯目テンジクネズミ科に属し、ペルーテンジクネズミが、インディオによって3千年以上前から食肉用に家畜化されたものといわれています。短毛(イングリッシュモルモット)、長毛(ベルビアンモルモット)、ヘアレス(スキニーギニアピッグモルモット)、巻き毛(アビシニアンモルモット)や、それらの色変わりなど、品種のバリエーションは豊富です。

(2) 形態、習性、生理

体長約21cmで尾はなく、体重は1.2kg前後です。頬袋はなく、食物を巢内に貯める習性や冬眠習性はありません。肛門の周囲に皮脂腺があり、尻を押しつけて臭い付けをし、嗅覚は敏感で他の個体の臭いを嗅ぎ分けます。聴覚も優れていて、小さな物音にも敏感に反応します。群居性で、色々な鳴き声でコミュニケーションを図っており、オスには順位制があります。食性は完全な草食性。人と同じく体内でビタミンCを合成できない数少ない動物です。本来は夜行性ですが飼い主の生活に活動周期を合わせることができます。平面活動が中心。暑さには割合に強く、寒さに弱い動物です。寿命は5～15年(平均10年)です。繁殖適期はメスで生後3ヵ月、オスで4ヵ月以上からで、妊娠期間は約70日、1回に平均4頭を産みます。約2週間で離乳します。

よほどのことがない限り噛み付くこともなく、オットリとした人馴れしやすい性質をもっています。排泄物の量が多いので掃除をこまめにしなければ臭いがきつくなります。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

屋外の小屋飼いや容易ですが、室内のケージ飼いが一般的です。ケージは水平的になるべく広いもの(1頭飼いで少なくとも50cm四方以上が理想的)で、高さは30cm以上あれば天井はなくても大丈夫です。床には木製のすのこ(足がすっぽりと抜けることのない、また、指を挟むこともない適度な隙間のあるもの)をとりつけ、その上に床材として干し草、ワラなどを多めに敷くと湿気対策になります。すのこの下には新聞紙を厚めに敷いておくと毎日の掃除に便利で、その他もウサギと同様にします。寒さに弱いので冬季は保温に気を付けること(18℃以上を保てるように工夫します)、また臆病、神経質なので物音にも敏感に反応

し、騒音があると用心して眠らずストレスがたまるということを考慮することが大切です。湿気対策や採光、日光浴などはウサギに準じます。屋外のサークル内の運動もよいでしょう。

(4) 飼い方のポイントと注意点

居性なので複数飼いは可能ですが、オスどうしは順位づけのためにけんかし、逃げ場所がないとケガをしますし、オス・メス混合飼養だとすぐに繁殖してしまいますので、考慮が必要です。

主食はビタミンC入りのモルモット専用ペレットにし、毎日朝夕2回与えます。ビタミンCは空気にふれると壊れやすいので、消費期限に注意し、開封したら保管に注意が必要です。副食としてビタミンCの豊富な色々な野菜(レタスは適しません)や、タンパク質が豊富な乾牧草(アルファルファなどのマメ科のものが適切。モルモットは植物性タンパク質を多く必要とし、また歯の伸びすぎ防止にもなります。)を毎日少しずつ与えます。ハコベやナズナ、シロツメグサ、タンポポなどの野草も喜びます。ビタミンCの豊富なミカンやイチゴ、キウイ、リンゴなどの果物も、糖分が多いので与えすぎに注意しながら時々与えましょう。カルシウム補給のためにペット用煮干しも時々与えます。

トイレのしつけは基本的にはできないと考えたほうがよく、また排泄物の量が多いので、床材の汚れた部分は毎日取り替え、すのこの下の新聞紙も湿気予防のために濡れたら上から取り除いていくと手間がかかりません。

長毛種は糞がこびりつきやすいので、お尻の部分の毛はカットするなりして、ストレスを感じさせないように注意しながら時々ブラッシングも心がけましょう。淋しがり屋なので1日1回はケージから出して遊ばせることが大切ですが、大声を出したり、急に乱暴に抱き上げて驚かせるとショック死することもありますので気を付けましょう。機嫌が悪い時に「キー、キー」と鳴いたり歯をガチガチと鳴らしたりすることがあります。

(5) 健康と安全の管理

主な病気と予防

病気発症の場合、ほとんどの例で治療効果が期待できないといわれています。多いのはビタミンCの不足による壊血病です。その他、呼吸器疾患や下痢、皮膚病(細菌や疥癬、シラミなどが原因)などがありますが、多くの死亡例は細菌やウイルス、真菌や寄生虫の感染症なので、特に複数飼いの場合は環境の清潔さを保つことが大切です。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。

8. チンチラ<げっ歯目チンチラ科>

(1) 分類、品種

チンチラはチリ北部原産で、げっ歯目チンチラ科に属しています。高価な毛皮のために狩猟の対象となり野生下では絶滅が危ぶまれていますが、人工繁殖が盛んで、原種は黄色がか

った灰色の腹部のほかは身体の大部分が青みがかった灰色をしています。黒っぽいもの、薄い灰色のもの、白っぽいものなど、色変わりの品種が作り出されています。

(2) 形態、習性、生理

体長約23～28cmで、体長の3分の1ほどの長さのふさふさと毛の生えた尾をもち、体重約500g、大きなものは800gくらいあります。本来は何十頭もの大きなコロニーを形成して暮らす群居性の動物で、夜行性です。食性は草食性で、草やその種子、果実、樹皮、サボテンの果肉などを食べていますが、昆虫などを食べることもあります。毛が薄い大きな耳を持ち聴覚は敏感です。身体には絹のような手触りの細くて長い毛が密生して保温の役目を果たしており、春と秋に換毛期があって冬眠習性はありません。毛は引っ張ると容易に抜けてしまいます。皮膚から出る分泌物(ラノリン)を取り除き清潔を保つために砂浴びが欠かせないという特徴をもっています。寿命は約10年で、生後4～6ヵ月で性成熟し、繁殖適齢期は6～8ヵ月くらいからです。妊娠期間は約110日、1回で1～6頭を産みます。生後約7～8週間で離乳します。

人馴れしやすい性質をもっていますが、怖がっているときに無理に手を出したり、急に鼻先に指をもっていったりすると噛み付くことがあり、思わぬ深い傷を負うことがあります。トイレのしつけも可能で、臭いはほとんど出しませんし、鳴き声も時々で「グーグー」と小声です。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

意外に活動的ですのでケージは広さ、高さともなるべく大きいもの(チンチラ専用ケージか、猫用ケージなら理想的)にし、ケージ内はウサギと同様にします。なお、チンチラ専用の砂浴び用容器を設置します。砂浴び用の砂は、目の粗いものは砂浴び本来の効果が期待できないので、必ずチンチラ用の砂か、細かく砕いた鉱物質の砂を用意します。また、天地の中間にジャンプしてもよいように柵板を設置し、その上に十分動けるくらいの広さの木製の巣箱を置き、中に干し草をたっぷりと入れます。ウサギと同様、高温、多湿に弱いことを認識する必要があります(温度は25℃、湿度は50%を超えないように)。寒さにはかなりの抵抗力がありますし、冬は冬毛で対応しますから、冬季の昼夜の急激な温度変化には気を付けながらも、巣材をたっぷりと入れて、ケージ全体を通気性のあるタオルで囲うくらいで保温にはあまり神経質になる必要はないようです。日光浴は特に必要ありません。臆病ですので静かな環境が必要です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

ウサギと同じように室内の放し飼いも可能ですが、安全性を考えれば室内のケージ飼いが一般的です。また、相性が合えば1つのケージに複数飼いも可能ですが、よほどの広さがなければストレスの原因になりますし、相性の合うオス・メスどうしだと容易に繁殖してしまいますので、1ケージ1頭が適当です。

夜行性なので食事は夕方に与えます。チンチラ専用かウサギ専用のペレットを主食にし、副食に乾牧草や野草を与え、おやつ程度に天日干しの人参やサツマイモ、干しぶどう、果物、

ナッツ類、ヒマワリの種を与えます。主食や副食の乾牧草などはやや多めに与えておき、あとの傷みやすい食物の食べ残しはすぐに片づけます。歯の伸びすぎ防止のために市販されているチンチラストーン(齧り石)や小枝、かじり木などを常備しておきます。尿量は少なく臭いもきつくないので、トイレの掃除は楽です。糞は毎日片づけましょう。床材は湿ってきたらすぐに取り替えることが大切ですが、たいてい週に2回程度でよいようです。砂浴びのときにたまに排尿することもあり、また、皮膚についていた虫を落とすので、砂はこまめに取り替えます。適宜、ケージや機材全部の掃除が必要なことは他の動物と同様です。時々、柔らかなブラシでブラッシングが必要です。特に換毛期は念入りに。シャンプーは禁物です。トイレのしつけはウサギと同じようにできますので、ぜひ覚えさせましょう。ケージの中だけでは運動不足ですので、ウサギと同様に部屋の中で遊ばせましょう。人に馴れさせるコツは決して驚かせたり、あせって無理強いしないこと。好物の干しぶどうやナッツ類を使って徐々に馴らせば自分で膝の上に乗ってくるようになります。抱くときは、毛が抜けやすいので決して毛を引っ張ってはいけません。

(5) 健康と安全の管理

逃げようとしたときにあわてて捕まえようとしたり大きな音を立てたりすると、気絶したりショック死したりすることが多いので気を付けましょう。他については割合丈夫な動物です。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。

(6) 飼養上の知って置きたい法律、手続き等

「ワシントン条約」の附属書Iに掲げられる動物で、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」にも関係します。

9. シマリス<げっ歯目リス科>

(1) 分類、品種

シマリスはげっ歯目リス科に属し、人為的に改良された品種としては、色変わりのアルビノ(色素が欠乏したもの)とパイド(白ブチ)があります。モンゴルから中国北東部、朝鮮半島、北海道にかけての樹林帯に生息しています。ペットショップで見かけるシマリスの多くは中国産のシマリスです。

(2) 形態、習性、生理

体長約14cm、尾長約13cm、体重100g前後。前肢はハムスターと同じく非常に器用に動かせ、物を掴んだり毛づくろいができます。足の裏からは蠟状の分泌物を出します。尾が長いのは、木の上でバランスをとったり、冬眠時に身体をくるんで保温するのに役立ちます。昼行性で、視覚、聴覚は優れていて、嗅覚も10cmくらいの積雪の下の食物を嗅ぎ分けられるほど発達しています。単独生活者で、地中にトンネルを掘ってすみかとしています。日中は

樹上で過ごすことが多く、半地上、半樹上の生活を営んでいます。頬袋をもち、そこに詰め込んだエサを巣やその周辺に掘った小さな窪みに蓄え、疑似冬眠をします。食性は、ドングリや松かさなどの木の実(種子)を主とし、草の種子、野ブドウ、コケモモなどの果実、木の芽、虫類、鳥の卵なども食べる雑食性です。寿命は5～10年。性成熟は生後約半年くらい。繁殖期は春で、原則として年1回です。妊娠期間は約30日で、1回で4～5頭を出産します。離乳期は生後約1ヵ月です。

野性味を強く残しており、よく馴れているリスでもちょっとした加減で噛み付いたり引っかいたりすることがありますので、気を付ける必要があります。繁殖期には「キッ、キッ」など甲高い声で一日中鳴いたりしますので、集合住宅等で近隣に迷惑となる場合もあるかもしれません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

室内のケージ飼いが一般的です。ケージはできるだけ高く(1m以上)、広いもの(少なくとも50×50cm以上)を選びます。できれば2個のケージを使って自作し、もっと高さを確保すると理想的です。中に床から天井まで届く枝つきの太い木(クヌギなどの広葉樹で防腐剤が使われていないもの)を設置します。床には新聞紙かペットシートを敷きます。床の隅には、食器2個とセキセイインコ用の木製の巣箱(ケージの隅に巣材として干し草を置いておくと自分で巣の中に運びます)を置き、側面には給水ビンを取り付けます。運動のための回し車も取り付けてみて、利用しないなら取り外しましょう。

飼養環境としては、高温と夏季の直射日光に弱くて、熱射病、日射病に非常にかかりやすい動物であることと、急激な寒暖差に弱いことを考えることが必要です。留守中の冬の温度低下と夏の温度上昇には特に注意しなければ死なすことにもなります。騒音はストレスの原因になること、多湿を嫌うということ踏まえた環境が必要です。また、夜は暗く静かな環境が大切です。ケージに通気性のよい布をかぶせておくことが適切です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

昼行性なので、昼間の飼養管理がよくできる家庭環境であるかどうかを考えて飼い始めることが大切です。また、子リスのときから飼ったり、根気よく付き合っていけば人にもよく馴れますが、突然馴れなくなったり、それがずっと続いたりすることがありますので、基本的にはその姿や動作の愛らしさを愛でる動物であることも考える必要があります。単独性のシマリスはつがいにせず1匹ずつ別々のケージで飼うのが原則です。どんな組み合わせの場合でも、けんかして時には殺しあいに至ることがあるからです。冬眠性のリスですが、家庭ではハムスターと同様にしたほうが無難でしょう。

主食はリス用ペレットとハト用配合飼料にし、副食として色々な野菜や果物、野草と、ミルワーム、ゆで卵、ペット用煮干し、ドッグフードなどの動物性食物を、なるべく種類多く、少しずつ毎日与えます。食事は1日に1度午前中に与えます。量の加減は、夕方になって主食が少し残っているくらいを目安にしますが、腐りやすいものは早めに取り除きます。秋にはドングリも喜びます。なお、巣箱の中の食物の点検はシマリスが嫌うため頻繁にはしない

ようにします。

シマリスの足の裏から出す分泌物でケージが汚れやすいので、ひどくなったら洗剤で洗いますが、シマリスが違和感をもちますので、これもあまり頻繁にするのは控えましょう。

日光浴は、春や秋の日差しの柔らかい午前中にさせるとクル病の予防になりますが、日射病、熱射病にかかりやすい動物ですので、タオルなどで必ず日陰の逃避部分をつくります。初夏から初秋にかけての直射日光は禁物で、日光浴はさせないほうが無難です。

ヒマワリの種などを使って根気よく手に慣らすようにすればケージの外に出してふれあっても図れます。よく馴れているリスでも冬眠期前の秋や出産前後などには警戒心が強くなって鋭い歯で噛み付いたり引っかいたりすることがあります。そういう時期は無理にふれ合おうとしないで放っておくのがコツで、以後、人に馴れにくくなることも少なくなる傾向があるといわれます。また、ふいに掴もうとしたり、口元に指をもっていたり、手に保定しているときでもびっくりしたときに噛まれることがありますので、注意深く扱う必要があります。逸走防止はハムスターに準じますが、非常にすばやく少しの間隙からでも脱走しますので、ケア時の移し替えの際などには特に注意を要します。

発情期に鳴き声がうるさくなった場合、黒い布をかけると少しは薄らぐようです。

(5) 健康と安全の管理

急に驚かせたりすると気絶したりショック死することがありますので、部屋のドアの開け閉めも乱暴にしないように気を付けましょう。また、逃げようとするのをあわてて尻尾を掴むと皮がはがれますので気を付けましょう。

なお、発情期になるとオスの睾丸が下がってきて、腫れ物と間違われやすい点があります。

主な病気と予防

1) カゼ

肺炎になりやすいので、くしゃみをしたり、鼻水が出ているのが見られたらすぐに獣医師に診てもらいましょう。

2) 下痢

下痢は脱水症状を起こしやすく、体力もなくなると危険な病気です。普段からプレーンヨーグルトや市販されている乳酸菌の錠剤を与えたり、食物と水を新鮮に保つようにします。

3) くる病

カルシウムとリンのバランスが悪かったり、ビタミンDの不足でなります。バランスのとれた食事と日光浴を心がけましょう。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

わが国に生息するシマリス、台湾リスは「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」により狩猟鳥獣に指定されており、狩猟の対象にされていますが、違法捕獲は罰せられます。

10. プレーリードッグ<げっ歯目リス科>

(1) 分類、種類

北アメリカ原産のげっ歯目リス科の動物です。5種類のプレーリードッグに分類されていますが、ペットとして日本に輸入されていたのはオグロプレーリードッグと呼ばれる種類です。

(2) 形態、習性、生理

プレーリードッグは尻尾の短い大きなリスです。地中に張りめぐらしたトンネルに住み、コテリーと呼ばれる高度に組織化されたコロニーを形成しています。日中は地上にでて草を採食します。

厳寒時には冬眠もします。寿命は8～10年くらいです。体長(頭胴長)は28～35cmで、尾長は3～11.5cm、体重は0.7～1.4kgです。24～36ヵ月で性成熟に達します。28～32日間の妊娠期間で2～10頭(平均5頭)の子供を産みます。子供は35～42日で巣穴から出始め、42日で離乳します。捕獲時には噛み付きます。高音の警戒音を発します。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

プレーリードッグの習性に合わせ、1メートル四方の立体的な構造をした専用のケージで繁殖させることも可能です。床材にチップを敷きます。水飲みや食器は市販のもので十分です。しかし、彼らの行動から見た場合、逃走できないような排水性のよいコンクリート製で、少なくとも50平方メートル以上の動物舎を作り、その中に土を入れて地中に自由にトンネルや巣穴を作らした方が、よりよい飼養環境を提供できます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食としてウサギ用ペレットを与え、副食として種々の野菜を与えます。ドッグフードも食べますが、肥満の原因になります。脱走防止には、出入り口の施錠を確認します。

(5) 健康と安全の管理

ケージ飼養の場合、白癬菌などによる真菌性皮膚炎が多いため、頻繁に寝藁の乾草を交換するなど環境を清潔に保つ必要があります。土の中に巣穴を作ったプレーリードッグに乾草を与えると、採食するばかりでなく、古い巣材を持ち出し新しい乾草を持ち込む行動が観察されます。

(6) その他特記事項

平成14年、米国疾病対策センター(CDC)から米国内の動物輸出業者が扱うプレーリードッグが野兔病で大量死したという情報があり、また、ペストの媒介危険性があることが指摘されていること等から平成15年3月1日から「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」に基づき、輸入は原則禁止になりました。

国内繁殖の個体を飼う場合でも、ある程度の規模の専用施設が必要であり、国内で逃走、野生化した例もあることから、ペットとしての一般的な飼養には相当の配慮が必要です。

11. モモンガ<げっ歯目リス科>

(1) 分類、種類

モモンガはげっ歯目リス亜目(リス型げっ歯類)リス科に属します。愛玩動物としては主にアメリカモモンガとタイリクモモンガが飼われています。日本では、北海道にタイリクモモンガの亜種(エゾモモンガ)が、また本州、九州にはホンシュウモモンガ(日本特産でニホンモモンガともいう)が生息しています。

(2) 形態、習性、生理

体長17cm前後、尾長12cm前後、体重130g前後。リスの仲間ですが、大きく異なる点は夜行性であることと、体と手足の間に体毛で覆われた皮膜があり樹間を滑空することです。樹上生活者で、地上に降りることはめったになく、爪は鋭い鉤爪になっていて樹木を走り回ることができます。頬袋があり、秋には巣(木の洞)にエサを貯め、シマリスとは違って冬眠せず、冬は数頭から時には数十頭が群居してあまり巣から出ないで越冬します。冬ごもりのためにエサを貯め込み始める時期と冬ごもりのとき以外は単独生活が基本です。食性は植物食主体の雑食性で、木の葉、種子、昆虫、鳥の卵などと多彩です。寿命は5~10年で、生後約1年で性成熟し繁殖が可能となります。妊娠期間は約40日で、1回に平均3頭を産みます。離乳期は生後約50日です。

根気よく付き合えば人によく馴れてくれます。しかし、無理に掴もうとしたり、ふいに手を出して驚かせたりしたとき、またはよく馴れていないうちにさわろうとしたときは、噛まれて思わぬ深手を負うことがありますので、馴れていないうちは革手袋をして取り扱うのが無難です。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

シマリスに準じます。なお、巣箱は樹上性のためケージの上部に取り付けます。また、クヌギなどの自然木の棒を段差をつけて取り付けておくと、飛び移ったりして運動にもなりますし、爪の伸びすぎ予防にもなります。飼養環境として、夏季は、昼間眠っている巣の中が蒸れないよう、風通しのよい涼しい直射日光の当たらない場所に置き、冬は隙間風の入らない温暖な環境を保つことが大切です。日光浴は特に必要ありません。

(4) 飼い方のポイントと注意点

冬ごもりが不要な飼養下では、繁殖を目的としない限り単独飼いをするのが適切です。幼齢のうちから動物用ミルクを与えて世話をすればよく馴れてくれます。夜は暗くしなければ生活サイクルを狂わせて体調をくずす原因となりますので、部屋の照明は早めに消すか黒い布をかぶせるかして暗くしましょう。

夜行性なので食事は夕方の活動時期に与えます。食物の内容と世話はシマリスに準じます。量の加減は、朝方になって主食が少し残っているくらいを目安にします。野性味が強くてブラッシングや爪切りなどは人を怖がる原因となりますので、ケージの清潔さ保持と爪の伸び

すぎ予防が大切となります。なついてくれば部屋に放し、滑空をさせたりして運動とふれあいを図ることができます。その際、豆電球だけの照明にするか赤色電球を利用するようにし、飛び移ったときにケガをさせることがないように余分なものを取り除いておくことが大切です。また、部屋の中に糞尿を散らかしてしまうことがあるので、汚されて困るものはあらかじめ片づけておきましょう。なお、行動習性を考え、深夜はゆっくりと休ませましょう。ケージからの脱走や逸走防止のための措置はリスと同じく特に注意が肝要です。なついていない場合は、捕まえるのが大変ですし、無理に追いかけるとその後なつきにくくなりますので、部屋に放すのは控えたほうが賢明です。

(5) 健康と安全の管理

木の皮や木の芽など自然界にある食物を与え、果物や野菜など美食を避けるのが、病気にさせない飼養法の要点といわれています。

人と動物の共通感染症

ハムスターに準じます。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

わが国に生息するエゾモモンガ、ホンシュウモモンガは「鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律」により保護鳥獣になっておりますので、環境大臣が与える特別許可がない限り捕獲できないことになっております。

また、タイリクモモンガは外来生物法(特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律)の特定外来生物に指定されています。

12. ハリネズミ <食虫目ハリネズミ科>

(1) 分類、種類

ハリネズミは、名前とは違ってネズミの仲間(げっ歯目)ではなく、食虫目ハリネズミ科に属し、愛玩動物として一般的に飼われる種は、ナミハリネズミ、ヨツユビハリネズミ、アルジェリアハリネズミ、オオミミハリネズミがあります。

(2) 形態、習性、生理

体長は14~30cm位まで、体重も400~900g位までと種や個体によって様々です。聴覚、嗅覚ともよく発達しており、四肢は意外に長いため、逃げ足は人間の早足と同じくらいに速く、低い障害物も乗り越えられますし、場合によっては泳ぐこともできます(本来は水を嫌がります)。ときたま何らかの汚物を嚙んで、泡立った唾液を脇腹の針に塗り付けることがありますが、これは嫌な臭いや有毒な物質で捕食者からの攻撃に備えるものではないかと推測されています。

生息地の環境は種によって様々ですが、湿地には住まず、森林や草原、耕作地帯、乾燥地の木の根元や草むらなどにもぐったり草や落ち葉を集めたりして寝場所にし、単独生活をしています。基本的に夜行性で、行動範囲は広く、一晩に1kmから数kmに及ぶといわれています。

す。

食性はほぼ完全な動物食性で、ミミズやナメクジ、カタツムリなどの軟体動物や昆虫、両生類、爬虫類、ネズミなどの哺乳類と多彩です。生息地の状況や種によっては、人間の残飯や植物質も少量食べます。食物がなくなる時期には、寒い地方に住むものは低温下での冬眠、乾期がある地方に住むものは高温下での夏眠（休眠）をする習性があります。

寿命は5～10年で、繁殖可能な時期は生後2～8ヵ月頃からです。妊娠期間は約40日、1回で3～7頭を産みます。生後約6～7週間で離乳し始め、45～60日で独立します。

一般的におとなしく臆病ですが、怒ると噛み付くこともあります(オオミミハリネズミは、背中中の針が鋭くて素手でさわると痛く、個体差にもよりますが気性も他種と比べて荒く、体当たりで攻撃したり噛み付いたりすることも多いようです)。抜け落ちた針が刺さらないよう気をつける必要があります。ハリネズミはきれい好きであり自分で体の手入れをしますし、排泄物の量もあまり多くないので、管理を怠らなければ悪臭は出ません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

金属製のケージ飼いか水槽飼いが一般的です。高さはあまり必要とせず、平面的な広さが十分あることが大切です。ケージの場合は、よじ登って落下するとケガをすることがありますので、むしろ高さのないものを選ぶよう注意します。床材として、固まらないタイプの猫砂が適当ですが、干し草、ワラ、チップなど使いやすいものを選び、もぐれるくらいの厚さに敷きつめます。木製の巣箱(寝箱)は、アレルギー防止のため針葉樹以外の素材のもので、中で体を動かせる位の広いものを選び、中には干し草かワラをたっぷりと入れます。食器は2個用意し傷みやすいものとそうでないものを分けて入れますが、ハリネズミは手で物を掴むことができませんので、背の低い安定性のあるものを選びます。トイレは使いません。飼養環境としては、冬眠、夏眠をさせない温度管理をして飼ったほうが途中の死亡事故につながることもなく安全です。したがって、特に冬季の保温と、隙間風や昼夜の気温差には気をつけるとともに、夏季の高温と蒸れに注意する必要があります(20～27度が適温の目安)。

(4) 飼い方のポイントと注意点

夜行性であることを考え、自分の生活サイクルに合っているかどうか判断して飼い始めることが大切です。単独生活者なので一つの収容物に対して1頭飼いが原則です(繁殖を希望する場合でも、別々の収容物に入れたオスとメスのお見合い期間を設け、メスのほうにオスを入れる必要があります)。

夜行性なので食事は夕方に与えます。食欲旺盛なので、傷みやすいもの以外は容器に入れたままにしておきます。主食としてはハリネズミ専用フードまたはキャットフード(硬いものを齧ることはないのでドライタイプのもは湯でふやかします。また野生下では魚肉は食べないので、獣肉か鶏肉の総合栄養食タイプの製品を選ぶことが大切です)を与え、副食として市販の乾燥バッタや昆虫、ミルワーム、ゆで卵の黄身、牛の生のレバーや心臓などの動物性食品を種類多く与えます。ミネラルやビタミンの補給のため、時々食品にカルシウム粉や総合ビタミン剤を添加するとともに、塩土も置いておきます。また、たまに果物や野菜も

与えます。

行動範囲が広い動物ですので、できるだけケージ等から出して運動させることがストレス防止のために大切です。その際、サークルか段ボールなどで囲った中で遊ばせると個体の安全のためにもよいでしょう。日光浴はそれほど必要としませんが、野生下では比較的陽に当たる環境に住んでいますので、ときどき穏やかな陽に当てると喜びますし、皮膚病の予防にもなります。日陰の避難部分を作った上でケージ等ごと日なたに出したり、同様にして庭のサークル内で運動させるのも適当です。室内に放す時は、逃げ足が速いことを考慮し、戸締りなど逸走防止の措置をとることを忘れてはなりません。ふれあいを図る場合は手袋をすると人の安全と保健のためには有効です。運動が終わったら、抜けた針が落ちていないか調べ、糞尿の始末もきれいにしましょう。

(5) 健康と安全の管理

外部寄生虫(ダニ、マダニ、疥癬など)が多く、マダニなどは輸入時にすでに寄生していることも考えられるため、予め動物病院で検査してもらいましょう。予防には特に環境の清潔さを保つことと、高温、多湿を避けるようにします。

人と動物の共通感染症

ダニ脳炎、サルモネラ症、レプトスピラ症、ロッキー山紅斑熱、疥癬などが可能性として考えられます。

(6) 特記事項

イギリスの島で人為的に移入されたものが繁殖し生態系に影響している事例があり、逸走及び遺棄の防止には特に注意する必要があります。

13. フェレット<食肉目イタチ科>

(1) 分類、品種

フェレットは食肉目イタチ科に属するイタチの仲間です。ヨーロッパケナガイタチを家畜化したもので、ウサギ狩りやネズミなどの退治のために、また毛皮用として飼われてきました。毛色のバリエーションは多彩です。品種によって性格に少しずつ違いがあるようです。

(2) 形態、習性、生理

体長30~50cm位、尾長10~20cm位、体重0.7~3kg位でオスよりもメスのほうが小さいのが目立ちます。後肢だけで立ち上がることができ、また体はしなやかで、前肢は短く器用ですので、かなり細い穴や通路でも素早く通り抜けられます。穴や隙間に潜りたがる習性があり、穴掘りも得意です。前肢の親指は他の指と向かい合うようになっているので物を握ることができます。鋭い爪は猫のように出し入れできません。夏毛と冬毛とに生えかわる換毛期があります。肛門腺をもち、驚いたり危険を感じたりすると強烈な臭いのする分泌液を霧状に吹きかけて防御しますが、この臭いはなかなか消えません。メスの繁殖生理は交尾排卵で、発情時に交尾をしないと、発情が止まらない「エストロジェン過剰症」というホルモン

中毒を起こし死に至ることもあります。フェレットの原種は森林や沼地で地中に巣穴を掘って夜行性の単独生活をする肉食獣です。寒さには抵抗力がありますが、暑さには大変弱く、熱射病にかかりやすい体質があります。寿命は6～10年位で、性成熟はメスが7～10ヵ月位、オスが8～12ヵ月位です。妊娠期間は約40日、1回で3～7頭を産みます。生後約1ヵ月で離乳します。

人馴れしやすく、馴れたものは噛んだり攻撃したりしません。しかし、怒っているときに無理にさわろうとしたりすると咬まれることがあります。オス、メスとも性成熟する前(生後6ヵ月頃が適当といわれます)に不妊手術をすればおとなしくなる傾向があります。肉食のため、猫と同じように糞の臭いは強めです。しかし、体の手入れや掃除を怠らなければ、気になるほどの臭いは出しません。通常は近所迷惑になるような鳴き声は出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

室内のケージ飼いが一般的です。1つの収容物での複数飼いは可能ですので、どうするかにより収容物の大きさを考えます。中が2階建て以上の造りになったものなどフェレット専用の金属製ケージが色々と市販されています。

床は足を挟まない程度の隙間があいた木製のこにし、その下に新聞紙を敷いておくと掃除に便利です。床の隅に食器2個とトイレ(壁際や四隅に排泄する習性がありますので、入り口以外が高くなった専用のものが市販されています。中に猫砂を敷きます)を置きます。寝床として、ふわふわしたものを好む性質があり、ハンモックや布製のトンネルなど色々と市販されているものや自家製のものを工夫して、適当な場所に設置します。給水ピンは、多くの水を飲みますので専用のものを使用します。脱走防止のため扉の留め金(ナスカン)も必要です。部屋に出したときにも安心して休める場所として木製の巣箱(中に指を引っかかない布などを敷きます)か市販の専用テント又は寝袋、その他トイレも用意しておきましょう。

飼養環境としては、特に暑さに弱いということを考え、夏季は直射日光が当たらない、風通しのよい涼しい場所にケージを置くことが大切です。寒さには抵抗力がありますが、急激な温度差や隙間風は悪い影響を与えますので注意しましょう。人間の生活サイクルに合わせられますが、いつも明るいという状態にしないよう配慮することが大切です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

遊び好きで、コミュニケーションをとる時間が少ないとストレスとなります。留守がちな飼い主の場合、複数飼いや考慮する必要があるでしょう。

肛門腺からの分泌物は人体に悪影響を与えますので必ず肛門腺除去手術をした個体を飼うようにしましょう。また、繁殖を希望する以外では、1頭飼いの場合でもメスは必ず不妊手術をした個体でなければなりませんし、飼いやすさの観点からオスも不妊手術をした個体が適当です。なお、この不妊手術の必要性は、万一逸走した場合に、生態系を崩す危険がありますので、その観点からも特に注意する必要があります。

フェレットは食物の消化時間が短く“貯め食い”ができませんので、1日に少しずつ何回か

に分けて食べる習性があります。したがって、基本的には朝夕の2回食事の世話をするようにし、好きなときに食べられるように主食は容器に入れたままにしておくといよいでしょう。肉食のため高タンパク、高タウリンを必要とします。そのために製造された専用のペレットを主食として与えます（生後3ヵ月位までの幼獣には猫用のミルクでふやかして1日に6、7回に分けて与えます）。主食だけでは飽きますので、ゆでた鶏肉やペット用煮干しなどの動物性食物もおやつ程度に与えます。野菜、果物、イモ類も好物ですし、専用のドライフルーツもあって、ふれあいを図るための利用には有効ですが、植物繊維は消化しにくく下痢の原因になりますので与えすぎに注意が必要です。水はかなりの量を飲みますので切らさないように注意することが大切です。糞の臭いが強いのでトイレの掃除はこまめにするようにしましょう。

フェレットはふれあいが大切で、毎日1時間位は室内で一緒に遊んでやらないとストレスとなりますから、小さいときからのしつけが重要です。手を咬んできたら指ではじいて叱れば徐々に咬まなくなります。

トイレは隅のほうにする習性がありますので、しやすい所を見定めておき、臭いをかぎながらウロウロしたり、尻尾を持ち上げて後ろにさがっていくような動作をしたら、トイレに連れていきます。寝起きのときや食事後にすることが多いので、そのときは注意深く見守って失敗させないことがコツです。体の隅々までさわって人の手にも十分に馴れさせておけば、爪切りや耳掃除、ブラッシングも容易となります。ブラッシングは換毛期には毎日することが大切です。爪切りや耳掃除も適宜必要です。本来、水を嫌いませので、コミュニケーションのため、また体を清潔に保つためにも、たまにシャンプーをしましょう。しかし、やりすぎは皮膚を乾燥させますので、1ヵ月に1～2回を限度にするようにしましょう。胴輪を使って庭や外の散歩も可能です。道路などは車や自転車などの事故防止のためキャリーバッグに入れるか抱いて歩き、空き地や公園などの安全な場所で目を離さないようにして遊ばせたり連れ歩いたりするのが適切です。脱走の名人であることに留意し、ケージの扉は厳重に留めておくこと、室内で遊ばせる場合には予め窓やドアは閉めてあるかどうか確認して逸走防止を図らなければなりません。

(5) 健康と安全の管理

室内で遊ばせることが必要なフェレットの場合は、安全のため特に次のような点に注意しましょう。すなわち、思いもかけないようなところにも潜り込んで出られなくなる場合もありますので家具類の下などの隙間は塞ぐこと、誤って踏んだりしないよう洗濯物などを取り除いておくこと、高さがわからないので落下による椎間板ヘルニアなどの予防のため高いところに登れる足場となるようなものも取り除いておくこと、ぬいぐるみや羽毛マットなどの毛のあるものは本能的に咬んで毛球症を引き起こしやすいことや、ストッキングやゴム製品などの異物の飲み込みも多いので、これらもまた取り除いておくことです。また、無理な姿勢で抱いたり尻尾を持ったりすると脱臼や骨折の原因になりやすいことにも注意する必要があります。

主な病気と予防

1) 犬ジステンパー

感染すると死亡は免れません。ワクチン接種が必要です。

2) インフルエンザ

人間のものも感染します。くしゃみをしたり、鼻水が出ているようならすぐに獣医師の診察を受けましょう。

3) 副腎の腫瘍等

早期の不妊手術などが原因で副腎に腫瘍や障害が見られます。脱毛などが起きますが、腫瘍の場合はしこりがあるのに気付くことがあります。

4) 低血糖

食事の回数が不適切な場合や、空腹によって起きます。弱ってヨダレを垂らし、食物を受けつけなくなります。保温して糖分を与えましょう。

5) 腸閉塞

換毛期などに毛を飲み込んで起こしたり、前述の異物の飲み込みが原因であったりします。

6) フィラリア

犬と同じです。

人と動物の共通感染症

サルモネラ症、カンピロバクター症、狂犬病、レプトスピラ症などが可能性として考えられます。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

条例により飼養開始の届け出を義務づけているところがあります。

14. スカンク <食肉目イタチ科>

(1) 分類、種類

食肉目イタチ科に分類される小型の肉食獣です。ペットになっているのはシマスカンクと呼ばれる種類です。

(2) 形態、習性、生理

ふさふさした被毛で、毛色は黒と白のツートンカラーの縞模様をしています。危険を感じる肛門腺から猛烈な臭いを発射します。また、興奮すると、尾を上げて威嚇動作もします。飼養する場合は臭腺の除去が必要です。藪や岩のごろごろある草地に生息し、夜行性です。寿命は6～10年です。体長(頭胴長)は28～38cmで、尾長は18.5～43.5cmで、体重は3.0～10.7kgです。11ヵ月で性成熟に達します。59～77日間の妊娠期間で1～10頭(平均4～5頭)の子供を産みます。子供は56～70日ほどで、離乳します。

(3) 飼養上必要な施設、樹材及び環境

大型の犬用のケージで飼養は可能です。動物が生活しやすく飼養管理を容易にするため床はチップを敷きます。動物が休む寝小屋も設置します。水のみや食器は小型犬用のもので十分です。寒さには強い動物ですが、日当たり、通風のよい場所にケージを置きます。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は缶詰のキャットフードを与え、副食として少量の果物や野菜、ゆで卵などを与えます。肥満しやすいので体重を定期的に計測し、食事でウエイトコントロールを行います。

(5) 健康と安全の管理

スカンクは他の動物の感染症に感受性があります。犬や猫からの感染症を予防するため、犬ジステンパー、犬肝炎、レプトスピラ症、猫汎白血球減少症など犬や猫とほぼ同じワクチン接種が有効です。肥満は飼い方のポイントを参照して下さい。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

スカンクはアライグマと同様に北米では、狂犬病のキャリアーとなっています。そのため、平成12年1月1日より、「狂犬病予防法」の改正に伴って、狂犬病の検疫の対象動物として犬に加えてスカンクも追加されています。

15. アライグマ<食肉目アライグマ科>

(1) 分類、種類

食肉目アライグマ科の動物で、カナダ南部、アメリカ合衆国、中央アメリカのアライグマとコスタリカ東部からペルーやウルグアイ東部に生息するカニクイアライグマの2種に分類されます。ペットとして一般的なものはアライグマです。

(2) 形態、習性、生理

水辺の森に生息し、木登りや泳ぎが上手です。餌などを水に入れて洗うような動作(野生での餌探し行動)がアライグマの名前の由来です。夜行性の動物ですが、昼にも活動します。寿命は14年くらいです。体長(頭胴長)は41~105cm、尾長は19~41cm、体重は5~8kgで、オスの方がメスよりも大きいです。オスは24ヵ月、メスは12ヵ月で性成熟に達します。63~73日間の妊娠期間で1~7頭(平均3~4頭)の子供を産みます。子供は49~120日で離乳します。成長すると凶暴になり、人に噛み付く危険性があります。身体は軟らかく、また力が非常に強いため捕獲が容易ではありません。大きな声は出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

子供のときは犬用のペットケージで十分飼養することができます。しかし、地方自治体によっては規制対象動物となる場合もありますので、条例の基準に従ったケージが必要です。飼養面積はできる限り広く取り、少なくとも10平方メートルとします。広ければ広いほど管理が楽になります。床は、穴を掘ることを防ぎ水洗いも容易であるコンクリートにし、水洗いのための給排水設備を設けます。放飼場所と寝室を仕切れるようにすれば、動物と一緒にケージに入らないで飼養管理をすることができます。放飼場に木登り用の止まり木も必要で

す。水飲みや食器はステンレス製の犬用の市販品で十分です。丈夫な動物ですので、気温や湿度を気にすることはありませんが、日当たり、通風のよい飼養場所が健康に飼養するためには不可欠です。

(4) 飼い方のポイントと注意点

リンゴやバナナ、ニンジンなどを主食とし、併せて乾燥ドッグフードを副食とします。肥満し易いため、バナナなど甘いものを控えめにします。与えたものを水に入れてから食べる習性があるため、水のみは大き目のものを用意します。ケージに止まり木を設置し、立体的にケージを利用できるようにして運動量を確保します。アライグマは非常に器用な動物ですので、脱走防止のために、飼育作業の後は必ず施錠します。臭いが隣近所の迷惑にならないように、定期的な清掃が必要です。また、ケージの中に直接手を入れてアライグマから危害を受けないようにするためには、人止め柵の設置は効果があります。去勢など犬や猫の繁殖制限の方法が利用できます。

(5) 健康と安全の管理

アライグマは人や他の動物の感染症に非常に感受性があります。また、アライグマの回虫が人に感染し、寄生虫性脳炎を引き起こす恐れがあり、公衆衛生上問題です。そこで、飼養に際しては回虫の駆虫が不可欠です。犬や猫からの感染症を予防するため、犬ジステンパー、犬肝炎、レプトスピラ症、猫汎白血球減少症など犬や猫と同じワクチネーションが有効です。健康のバロメーターは食欲です。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

アライグマは北米では、狂犬病のキャリアーとなっています。そのため、平成12年1月1日、「狂犬病予防法」の改正に伴って、狂犬病の検疫の対象動物として犬に加えてアライグマも追加されています。また、外来生物法(特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律)による特定外来生物に指定されています。

(7) その他特記事項

日本の気候はアライグマが生息し易い環境であるため、名古屋や北海道などでは逃走、あるいは捨てられたアライグマが帰化動物として野生化し、日本固有生物の生息環境を脅かしています。アライグマのようにペットとして海外から輸入し、日本の気候に適応し易い動物は、日本の自然に野生化させないという原則を守るべきです。

16. フェネックギツネ<食肉目イヌ科>

(1) 分類、種類

フェネックギツネは北アフリカ原産の食肉目イヌ科ギツネ属に分類される最も小さな野生のイヌ科動物です。

(2) 形態、習性、生理

フェネックギツネは、ふさふさした被毛で、イメージは小型のギツネです。砂漠などに生

息し、夜行性です。寿命は12～14年です。体長(頭胴長)は35～41cmで、尾長は17～31cmで、体重は1～1.5kgです。9～11ヵ月で性成熟に達します。飼養下での交尾期は1～2月で、50～63日間の妊娠期間で1～6頭(平均2～3頭)の子供を産みます。子供は61～70日ほどで離乳します。糞や尿の臭いは犬と同じ位です。小さいとはいえ鋭い歯をしています。捕獲しようとするれば噛んできます。あまり大きな声を出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

大型の犬用のケージで飼養は可能ですが、少なくとも10平方メートルくらいの広さが必要です。広ければ広いほど動物が生活しやすくなりますし、管理も楽になります。床は砂やチップを敷きます。水のみや食器は小型犬用のもので十分です。寒さにはそれほど弱くはありませんが、寝小屋に遠赤外線などの部分暖房があった方がよいです。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は缶詰のキャットフードを与え、副食として少量の果物や野菜、ゆで卵などを与えます。砂漠など乾燥地域に生息する動物です。夜行性動物ですが、ケージや動物舎は日当たり、通風のよい場所に設置します。

(5) 健康と安全の管理

感染症の感受性は飼い犬と同様です。犬フィラリア症にも罹りますので、犬と同様に犬フィラリアを予防することが必要です。また、感染症を予防するため、犬ジステンパー、犬肝炎、レプトスピラ症など犬と同様のワクチネーションが有効です。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

平成12年1月1日より、「狂犬病予防法」の改正に伴って、狂犬病の検疫の対象動物として犬に加えて「きつね」も追加されました。そのため、キツネ属のフェネックギツネも対象動物になりました。

(7) その他特記事項

ペットとして飼養されるキツネ属にギンギツネがいます。飼養上の注意点はフェネックギツネとそれほど変わりがありません。しかし、臭いは強烈ですので、室内飼養には向きません。200平方メートルほどの広さで、穴を掘っても逃げられない構造の動物舎を作れば、キツネにとって飼養環境のエンリッチメントになりますし、穴掘りなどの自然な行動を見ることが出来ます。

17. ワラビー <有袋目カンガルー科>

(1) 分類、種類

ワラビーはオーストラリアに分布する有袋目カンガルー科に分類される小型のカンガルーです。一般的に販売されているのはダマワラビーと呼ばれる種類です。

(2) 形態、習性、生理

有袋類は重さ2gほどの未熟児の状態生まれた子供を下腹部にある皮膚の袋(育児嚢)

の中で哺乳しながら育てます。メスにはこの袋があります。外見からは分かりませんが、オスにも袋骨と呼ばれる骨が骨盤から伸びています。乾燥した藪の中などに生息し、薄暮から夜間に行動します。寿命は9年ほどです。体長（頭胴長）は42～68cmで、尾長は33～54cm、体重は2.6～9.9kgです。12～36ヵ月で性成熟に達します。28日間の妊娠期間で1頭の子供を産みます。子供は240日ほどで、育児嚢からでます。非常におとなしい動物ですが、捕獲時には両後肢で蹴ります。声は殆ど出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

跳びはねる動物ですのでケージでの飼養は無理があります。乾燥した場所に生息する動物ですので、水はけ、日当たり、通風のよい場所で飼養します。100平方メートルほどの面積の放飼場に雨の時や冬の寒さを避けることのできる3.3平方メートルほどの動物舎が必要です。犬小屋ほどの大きさの寝小屋も利用します。舎内には遠赤外線ランプなどの部分暖房器が必要です。また、動物が生活しやすく飼養管理を容易にするため、地面や床を砂地にします。水飲みや食器は犬用のもので十分です。寝床として乾草を用います。

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は草食獣ペレットやウサギ用ペレットを配合し、副食として青物、ニンジン、サツマイモ、リンゴ、バナナなどを与えます。口腔粘膜を傷つけ、顎骨の化膿性疾患（カンガルー病）を引き起こす恐れがあるため、粗雑な茎のある乾草の給与は控えてください。

(5) 健康と安全の管理

寒さに強い動物ではないので、風邪を引かせないように防寒に気を付けて下さい。カンガルー病については、飼い方のポイントを参照してください。有袋類はトキソプラズマに感染するため、猫の排泄物に近づけないようにします。

18. ポッサム（フクロギツネ）＜有袋目クスクス科＞

(1) 分類、種類

ポッサムはオーストラリア原産の有袋目クスクス科に分類される中型の動物です。

(2) 形態、習性、生理

体毛は密でふさふさした尻尾を持っています。森林で樹上性の単独生活を行い、夜行性ですので日中は樹洞のなかで寝ています。寿命は6～7年位ですが、14年8ヵ月生存していた記録もあります。体長（頭胴長）は32～58cmで、尾長は24～38cm、体重は1.0～5.0kgです。オスは9～24ヵ月、メスは9～12ヵ月で性成熟に達します。17～18日間の妊娠期間で普通1頭の子供を産みますが、2頭の場合もみられます。子供は4～5ヵ月で育児嚢を初めて出ますが、離乳には6～7ヵ月かかり、8～18ヵ月で独り立ちします。樹上性の動物ですので爪が鋭く、捕獲時には噛み付きます。声は殆ど出しません。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

2メートル四方ほどの金網ケージに止まり木、寝箱が必要です。出入り口は、二重鍵にし

ます。屋外の場合、寝箱に雨が入らないように屋根が必要です。床は土でもコンクリートでも可能です。水のみや食器は小型犬用のもので十分です。寒さには強い動物ですが、日当たり、通風のよい場所にケージを置きます

(4) 飼い方のポイントと注意点

主食は青物、ニンジン、サツマイモ、リンゴ、バナナなどを与え、副食として乾燥ドッグフードを与えます。隙間に潜り込むのが上手ですので、脱走防止のためケージの隙間を点検します。

(5) 健康と安全の管理

有袋類はトキソプラズマに感染するため、猫の排泄物に近づけないようにします。

(6) その他特記事項

日本の気候はポッサムが生息しやすい環境です。ニュージーランドでは19世紀にオーストラリアから毛皮の採取のために移入したポッサムにより、森林の葉が採食され大きな被害がでています。仮にペットとしてポッサムを日本に輸入して飼養するとしても、野生化させないという原則を堅く守る必要があります。

19. サル<リスザル：霊長目オマキザル科、マーモセット：霊長目キヌザル科>

(1) 分類、種類

サルは私たち人にとっても近い動物です。一般の家庭で飼養しやすい種類は、霊長目のうち南米産であるリスザルやマーモセットなどです。

(2) 形態、習性、生理

リスザル

オマキザル科。南米のコロンビアからパラグアイに生息する小型の昼行性のサルで、大きな群れ(10~35頭)を作って生活しています。寿命は12~25年です。体長(頭胴長)は23~37cm、尾は32~42.5cmの長さです。体重は500~1,000gになります。オスは54~60ヵ月、メスは30~36ヵ月で性成熟に達します。152~182日間の妊娠期間で1頭の子供を産みます。子供は120~180日で離乳し、12ヵ月で独り立ちします。無理に捕まえたりすると噛み付きます。糞や尿の独特な臭いがあります。大きな声はだしません。"

マーモセット

マーモセットは中南米にすむキヌザル科に分類される小型のサル類の総称です。ペットとして飼養されているコモンマーモセットは耳の房毛に特徴があります。ブラジル東部の熱帯雨林が原産で昼行性です。寿命は16年ほどです。大きさは、体長(頭胴長)13~30cm、尾長17.2~40.5cm、体重230~453gです。性成熟はオスで9~17ヵ月、メスで10~24ヵ月です。140~148日の妊娠期間で、1~3匹の子供を産みます。子供は42~84日で離乳

します。無理に捕まえたりすると噛み付きます。リスザルほど強くはありませんが、糞や尿の独特な臭いがあります。小鳥のような高い声をだします。

(3) 飼養上必要な施設、機材及び環境

小鳥用ケージ(できれば1立方メートル以上)でペア飼養は可能です。ただし、床もメッシュにして排泄物が下に落ちるか、あるいはチップを敷き、身体が汚れないようにする必要があります。水飲みや食器はケージに付属した容器で十分間に合います。休息できるような太目の止まり木を取り付けます。寝床が必要になりますので木箱や段ボール箱(30cm四方)をケージの上隅に備え付けてください。湿度はそれほど気にする必要はありませんが、室温は少なくとも15℃以上は必要です。また、ペットヒーターなど部分暖房も併設します。しかし、真冬でも風がなく日光が十分あたっていれば、屋外に出すことができます。ケージを置く場所は、日当たりがよく、通風のよい場所を選びます。ただし、真夏の直射日光は避けてください。

(4) 飼い方のポイントと注意点

食事は高タンパク質(粗タンパク質25%含有)が必要です。そのため、マーモセット用飼料などを主食とし、適量の青物やニンジン、サツマイモ、リンゴなどを副食とします。ただし、副食は25%以下に抑えます。マウスの赤子はマーモセットの好物の副食ですが、マーモセット肝炎の原因になることがあるため、欧米の動物園では給与を控えています。

食事および給水の回数は1日2回がよいです。というのは、一度に与えても食べる量が少ないため、回数を2回にすることで、新鮮な餌や水を与えることができるからです。

食物中のビタミンD₃をほとんど利用しません。毎日、直射日光にあたらぬ場合、餌からビタミンD₃を十分摂取することが重要になります。

全ての霊長類はビタミンCを餌から摂取する必要があります。市販のサル用のビスケットに添加してあるビタミンCは製造後6ヵ月以内で顕著な崩壊が見られるので、副食の青物、オレンジ、フルーツジュース、複合ビタミン剤やビタミンC剤で補う必要があります。

ケージの入り口には施錠し、脱走防止に努めます。また、飼育作業時には、飼養している部屋の窓や扉を閉め、部屋の外に逃げないようにすることも必要です。逃げた際には、捕虫網で安全に捕獲することができます。また、糞尿には独特な臭いもありますので、隣の家が接近している場合、飼養場所を考慮して迷惑防止に努めるようにします。

繁殖制限の方法としては、オス・メスの分離飼育のほか、不妊、去勢手術、オスのパイプカットなどがあります。また、繁殖能力を一時的に抑制する方法としてメスへのホルモン剤の埋め込みが有効です。

(5) 健康と安全の管理

サル類は人へ病気を感染させ、また、人から病気を感染されることがあります。飼い始めるときは、糞便の寄生虫や細菌検査等を獣医師に依頼することが必要です。また、飼い主が風邪などの病気にかかった場合、サルへ感染させますので、接触を避けます。特に、ヒトヘルペスのマーモセットへの感染は致死的ですので、口移しの給餌は絶対にはいけません。

熱帯地方が原産地ですので、寒くなると下痢したり、感冒に罹りやすいため、保温の注意が必要です。

健康のバロメーターは採食状況、便状です。また、人と同じように寒ければ震えますし、暑ければ呼吸が速まります。これらの症状を的確に観察し、早期に対処することが必要です。

栄養による病気の代表的なものとしてクル病や骨軟症、壊血病(ビタミンC欠乏症)があります。飼い方のポイントを参照してください。

手入れを怠ると、排泄物で身体が汚れて健康を害するため、清掃は定期的に行います。寝箱は汚れやすいため、ダンボールを使い捨てにするのも清潔に保つ秘訣です。

(6) 飼養上の知っておきたい法律、手続き等

サル類は絶滅の危機に瀕している動物が多く、全てのサル類が「ワシントン条約(CITES)」の附属書II表以上にランクされており、国際商業取引が規制されています。国内においても、これらのサル類はI表の場合、国内商業取引が「種の保存法」で規制されています。リスザルやコモンマーモセットは「種の保存法」に規制されないII表の動物ですが、適正に輸入された動物かどうかを確認する必要があります。というのは、平成12年1月1日より、動物の輸入検疫制度の変更に伴って、サル類のエボラ出血熱とマールブルグ病を対象としたサルの輸入検疫が「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」で義務付けられるようになったからです。ただし、国内繁殖が証明されれば、II表の動物は種の保存法には規制されません。

また、サル類のなかには、動物愛護管理法に定める特定動物(危険動物)、外来生物法(特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律)に定める特定外来生物に該当するものが多く含まれています。

(7) その他特記事項

日本に生息する中型のサルであるニホンザルは、捕獲については「鳥獣保護法」の許可が必要です。下北半島に生息するものは天然記念物に指定されており、「文化財保護法」で規制されています。成長すると力が強くなり、人に凶暴になります。

IV . 参考

< 引用及び参考資料 >

- ・ 今泉吉典監修 『世界哺乳類和名辞典』 (株)平凡社、1988
- ・ 正田陽一著 『家畜という名の動物たち』 (株)中央公論社、1983
- ・ 石川祥子著 / 小暮規夫監修 『初めての人の犬のしつけと飼い方』 (株)西東社、2001
- ・ 西東社出版部編 『子犬の飼い方・育て方』 (株)西東社、2002
- ・ 鈴木立雄、小方宗次監訳 『犬種と疾病』 文永堂出版(株)、1989
- ・ 『愛玩動物飼養管理士教本 (2 級・ 1 級) 』 (社)日本愛玩動物協会
- ・ 『飼育読本シリーズ』 (社)日本愛玩動物協会
- ・ D.W. マクドナルド編・今泉吉典監修 『動物大百科』 (株)平凡社、1986
- ・ 宇田川龍男著 『ハムスター・ウサギ・リス・モルモットの飼い方』 (株)梧桐書院、1996
- ・ 宇田川龍男著 『ハムスターの本』 モンキーブックス、1988
- ・ 道行めぐ著 / 平井博監修 『かわいい小動物の飼い方』 (株)西東社、1998
- ・ 霍野晋吉監修 『ウサギとハムスターとフェレットBOOK』 成美堂出版(株)、1998
- ・ 霍野晋吉監修 『ハムスター・ウサギ・リスたちと暮らす本』 成美堂出版(株)、2001
- ・ 福田啓一監修 『リスハンドブック』 (株)あおば出版、2002
- ・ 長坂拓也著 『ハリネズミクラブ』 (株)誠文堂新光社、1997
- ・ 中山沙織著 『かわいい小動物の飼い方・育て方』 (株)ナツメ社、1997
- ・ 山根義久、長谷川篤彦監修 『メルク獣医マニュアル第 8 版』 (株)学窓社、2003 (発刊予定)
- ・ Toni Danzig・Project Cordinator and Editor ; Biological Values for Selected Mammals, Third Edition, American Association of Zoo Keepers, Inc. 1992"
- ・ 清水悠紀臣ほか編 『獣医伝染病学 (第四版) 』 近代出版、1995
- ・ James R. CAREY and Debra S. JUDGE Longevity Records : Life Span of Mammals, Birds, Amphibians, Reptiles, and Fish Odense Univ. Press 2000"

< 関係法令・条約等参考ホームページ >

環境省 (<http://www.env.go.jp/>)

- ・ 動物の愛護及び管理に関する法律
- ・ 家庭動物等の飼養及び保管に関する基準
- ・ 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律
- ・ 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律
- ・ 生物多様性条約
- ・ 生物多様性国家戦略

厚生労働省 (<http://www.mhlw.go.jp/>)

- ・狂犬病予防法
- ・感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律

農林水産省 (<http://www.maff.go.jp/>)

- ・家畜伝染病予防法

外務省 (<http://www.mofa.go.jp/mofaj/>)

- ・ワシントン条約

文化庁 (<http://www.bunka.go.jp/>)

- ・文化財保護法

ペット動物販売業者用説明マニュアル（哺乳類）

環境省自然環境局総務課動物愛護管理室

〒100 8975 東京都千代田区霞ヶ関1 2 2

電話：03 3581 3351

請負者：社団法人 日本動物保護管理協会

〒107 0062 東京都港区南青山1 1 1 新青山ビル西館23階

電話03 3475 1695 FAX：03 3475 1697

発行：2003年3月

【マニュアル研究会委員（50音順）】

委員長 小暮規夫（小暮動物病院院長）

榎 敬蔵（社団法人日本愛玩動物協会理事）

永淵恒幸（東京都動物愛護相談センター指導監視係監視担当係長）

橋崎文隆（東京都建設局恩賜上野動物園飼育課動物病院係長）

山口千津子（社団法人日本動物福祉協会調査員）

本マニュアルは、環境省の承諾を得て転載しているものです。